

松葉名所和歌集第5 与 太

定 川野渡里入江 山城 東又世御

〇九 城豆夜とともにも道山渡野のあやめ草けし誰船のつまと成覽

〇一〇 同 あししき君かよとのあやめ草引くしき物のなき哉

〇一〇 同 立はとのかさねかはらけなりせばふはえて渡の渡りせましや

〇一〇 同 名奇綱手引竹の下道霧こめて船路に逢ふ渡の河さし

〇一〇 同 渡川の入江の岸の柳陰つなける舟に涼む里の子

〇一〇 同 高瀬さす渡の渡りは道たえてまた夜深さに立霞かな

〇一〇 同 拾玉昔思ふ渡の渡り友千鳥通ひなれたる声きこゆ也

〇一〇 同 人わたり渡の河渡りどけかけしゆわが手にあはらるしに

〇一〇 同 朝またさす渡の渡りのわたりし守霞のそとに船よはふなり

〇一〇 同 はのくとかよふ小舟を立こめて霞によする渡の川なみ

〇一〇 同 拾玉我志は心づくしに行舟のけし清もむる渡のあかつき

〇一〇 同 詠藻これも今ふがきえたをも思ひしれ渡のわがこもりね成とも

〇一〇 同 純す引よとのと里のあやめ草猫万代もねはとむしん

〇一〇 同 家集雨ふれば草葉の露もまこりけり渡の渡りのあまほゆるかも

〇一〇 同 行人も帰るもみゆる渡りはなみのころもひなかりしむ

〇一〇 同 渡りや過てあなだにあるみのへそそまたみね駒の立せも

〇一〇 同 渡河のつらふる若草のねをし尋ねはせも有なん

〇一〇 同 五月待ほとに水木まさりつよよとのまこもふにける哉

〇一〇 同 新大渡りにけてなける鯉をのみ誰も此は夜りつまで

〇一〇 同 三月清行未のまきえたとて契つるまたもすはれぬ渡のわがこも

〇一〇 同 三九夫木まこもか渡野にある春駒はなつても事をもけんやしる賢見

〇一〇 同 雨晴る美豆のみ牧のまこも草かくて吹はす渡の川風

〇一〇 同 風の音はとは田の面にたき立ぬ渡の渡りに秋をさぬらむ

顯季 〇四三 同 水まさる渡の河瀬にた 野馬の立てもあてなかね日せなき

〇四三 同 船おとす渡の川瀬の朝霧にたえくみゆる岸のから人

後頼 良峯 山城

家隆 西山の良峯といふ寺にまうて外祖文連生

經光 法師旧跡の花の散侍けるを見

慈鎮 〇四三 新千尋来てむかしをもへは山里の花のしくも涙なりけり

〇四三 同 吉田 村野森吉 同 近江有周君

〇四三 同 拾遺名にたてる吉田の里の杖なればつくとももし君か万代

〇四三 同 夫木吉田野のさねにも松はあらねともまにくみつら神楽岡哉

〇四三 同 天木行末もよしたの柱の藤の花にたてぬ中の光をも侍

〇四三 同 しろしめれは吉田の森のゆふたすもかきにいともかへる頼は

〇四三 同 千首程もかき吉田の宮のかくし岡さて松風の音ははりつ

源順 吉野 河山地也 大和

清正 〇五三 万一よき人のよしとよくみてよしといひし吉野よみよき人きみ

兼輔 〇五三 万二みよしの玉松かえははしきかも君かみしをも持てかよ

朝忠 〇五三 万三みよしの玉松かえははしきかも君かみしをも持てかよ

元真 〇五三 同 吉野河ゆく瀬草みしほくも絶る事なかりせぬかも

夜笠 〇五三 同 六山高み白ゆふ花に落滝たきの河内はみれとあかねかも

後兼極 〇五三 同 千鳥鳴みよしの川の音しきみやむ時なしよほゆる若

甲斐 〇五三 同 あかねさす日ももへびくに我志るよしの河の霧に立つ

忠走 〇五三 同 万代に見ともあかねやみよしの滝つ河内の大官所

慈鎮 〇五三 同 人みな命も我もみ吉野の滝のこも若の常ならぬかも

尤俊 不説人 善家

兼盛 不知 野長

伊長 為才

〇五三同	無人のせとの考ほも鮎はしるよしの滝にほむしかすけり	助大伴	〇八四同	御調物君か御代には吉野河よし心みよ玉やしける	忠房
〇六三同	神代より吉野の宮にあり通ひ高くしれは山河をよみ	赤人	〇八五同	吉野河せの岩波いおてのみくろしや人を立ちこむるよ	藤順
〇六一同	馬なめてみよし野河をよみまほり打越来てよ滝に遊ひつる	無名	〇八六同	昨日まで雪にこもりしみよしの霞はしや立てせむらん	同
〇六二同	みんへ恋るみ吉野けしめはむも恋けれ山川さまみ	同	〇八七同	みよしの吉野の山は百年の雪のみつまるこころ成けり	貫之
〇六三同	吉野川岩をかほと帝 磐な我がは通はん万代まで	同	〇八八同	家集行年のこえては過ぬよしの山に万代つもりなる霞見	信明
〇六四同	九馬なめて打むれ越きけふみつるよしの河をい帰りに見ん	元仁	〇八九同	吉野河ふるす残の折こころ思ひもよし下波の心を	元真
〇六五同	見まほりこしくもしく吉野河言さやけさみるにもしき	嶋足	〇九〇同	さき咲すつけよ吉野の山椿霞晴なほよにてみん	同
〇六六同	古の賢き人のあせみけんよし野の河原吹れとめかぬかも	人丸	〇九一同	霞たつよしの山を越くれはおもとは春のともりせけり	忠見
〇六七同	十蛙鳴よしの川の滝の上につしの花やとくにもまほき	無名	〇九二同	浅緑春はさぬとやみよしの山の霞の色にみゆるん	同
〇六八同	みよし野の岩もととく下馬蛙へも鳴けり河をさやみか	同	〇九三同	家集滝の糸はみんとつしん吉野山雪の高どととまか	中務
〇六九同	みよし野のてくも昔をよまなくに刈のみ菊で乱はんこ	無名	〇九四同	山暮集誰か又花を尋てよし野山苔ふみ分る若伝ふ野見	面行
〇七〇同	み雪ふるもしつ高にふる雲のよせにみし子に恋渡らむ	同	〇九五同	まか山色に花咲ぬれはよしの山春は晴せぬ嶺う白雲	同
〇七一同	我せうかたふんさきにするつふれ石の吉野の山に氷魚とせかれ	安倍	〇九六同	すぞ野焼煙ぞ春は吉野山花をへたる霞せけり	同
〇七二同	古もおもほすししも我おほきみよしの宮をも有通ひぬす	大伴	〇九七同	芳野山谷へたびなく白雲は峯の梅の花にや有野見	同
〇七三同	津巻雲間なき吉野の山を尋ても心のわよふ跡たえぬおも	女房	〇九八同	木の木に放後とすればよしの山花かふすまをさきする春せ	同
〇七四同	六百巻風来みけりしも葉ふる里ほよしの山の雪けせけり	頭昭	〇九九同	よしの山椿にまか白雲の散なん後は晴すもあらん	同
〇七五同	芳野山すつかりぬも霜来て松風はやしふけぬ比よは	有家	一〇〇同	吉野山むらみゆるしく雲は咲をくれたる椿なるへし	同
〇七六同	我恋に深さくらへはと山か吉野の泉の岩のかけみ	一〇三同	よしの山麓にふらぬ雪はら花かみみてや尋いとまし	同	
〇七七同	ふみめても朝ぬ気色のつれなきやよしのよくの岩のかけ道	春隆	一〇三同	ふかくは月ゆへとしもなき物よりきと思はん女吉の山	同
〇七八同	此世は吉野の山の奥たにもありしはつらも人にしられし	家達	一〇三同	吉野山花の散にし木の木にとかし心は我もまつらん	同
〇七九同	千五百雪がき吉野の高も出る日と山に霞む春はさきにけり	隆信	一〇四同	芳野山ふもとの滝に流す花や嶺につもりし雪の下水	同
〇八〇同	五百吉野山ふもともみえす春のけで霞の衣たちてきたれば	基俊	一〇五同	ぬにかへる花をもとくりて吉野山夏もさかみに入て出ぬ	同
〇八一同	谷隠また雪きえぬみよしのよふ山へに立霞か	頭仲	一〇六同	拾玉春たつといふ計にも霞むなるよしの山の明ほの空	慈鎮
〇八二同	見渡せば春の霞にこめられていつ成らんみ吉野の山	紀伊	一〇七同	花にあかて終に此世をそむまなほ吉野の山を柵にせせん	同
〇八三同	よしの山嶺の風のはけしさにこの庵は露もたまらず	同	一〇八同	柴のたに匂山椿をみてもまつ吉野の山の嶺をしそ思	同

〇九三 同 昔見し人煙やよしの山花ほかへる雲と成らん

二〇三 同 吉野山春梢をむかむれば風にときゆる花の白雲

二一三 同 猫ふかく心はけむ吉野山うも世出たる身とは思はし

二二三 同 立こむる霧はいつくもかからぬと夜深きはみよしつ谷

二二三 同 詠 蓬萊の庭の雪は猫しかしみは白妙のみよしの山

二四三 同 吉野河老こす涙を詠れば絶せぬ水の心とせしる

二五三 同 現六女よしのは谷の吉野近行ればまつなれそむる鶯鳥の声

二六三 同 みよし野の老測なれをしもいかてふかめて頼初けん

二七三 同 月清吉野山雲しく岑に跡ともて落世を聞ぬ風の音哉

二八三 同 みよし野は花の外さへ花なれば植立山の白雲

宜寸河

大和

藤壘五添上野ヨキリナ
ヨシ河と云トイヘリ

二九三 万十二わきもるに衣春日のよしき川よしもあらぬ妹か目も見ん

一〇三 夫木世の中は衣春日よろし河ともよろしくぬる袖哉

余良山辺

同 八雲御抄并藤壘二當因

二二 万十四梓そよりの山へのしげかくにもうもたてそねとはらふも

因可池

河内

名寄 歌枕 喜因

二三 万十二いかるかのよるかの池のよろしくも君をいはねは思ひてわかする

二二三 正冷白いかるかの因可の池のよるへにもひたにとせおもふ心と

二四 玉吟上寒の夜今朝けが討いかるかよるかの池は氷しぬらん

二五 同 下かた余うよるかの池のぬねはぬねまは浪の下にくるしき

二六 夫木いかるかやよるかの池は凍れ共雪の川を流たえせぬ

二七 同 朝水結ひにけりな白雲のよるかの池はゆる鳥もなし

横野堤

和泉

二二三 詠 古霜枯れよ野の堤風さえて入塩遠く千鳥鳴なり

吉見里

同 藤壘

二二三 六帖月をたによしみの里の秋の暮松風なるとも人もなし

横山

同 武蔵 庄同名

二〇三 新大なるとしていかたやけはかりみなるよ山茂のしらく成らん

余遠淡

和泉

名寄 歌枕 二當因

一三三 懐中常はぬ世とのみなとか恨らん人の心の定なきもけ

渡継橋

摂津

類守

一三三 詠 古まの浦の渡のつき橋つきもせずしらし人も聞渡る哉

一三三 十五百 五月雨に渡のつき橋跡もなしこれも長柄の名をなかつこ

一四三 夫木ふるりの渡のつき橋いとしく春風渡る柳かけかな

一五三 同 絶たぬみるのもしもぬまの浦に渡すかひなき渡の継はし

一六三 浦の小管の笠を取もあす時雨で渡る渡の継橋

一七三 單履登五月雨に渡の継橋絶しよりひまびく渡すまの浦船

依羅森

同 藤壘

一八三 愚草下君か代はよきみの杜のことは松と杉とや十度さかかん

夜寒里

尾張

藤壘

一九 堀後袖かはす人もなき身もいかせん夜さむの里に嵐吹せ

二〇 名寄 嵐ふく夜寒の里のぬ覚はいと人こそ志しかりけれ

二一 夫木もろとも鳴あかしたる春夜寒の里の草の枕に

藤 頼

俊 成 女

尤 俊

經 朝

衣 長

為 衣

隆 祐

中 務

頭 阿

定 家

頭 仲

同

仲 実

一四三 同 聞よに風吹そふ秋して夜寒の里の衣うつらん

喚続淡 同 類考

一四三 斬復揮鳴海鳴夕浪もより立降り友よびつきの浪に鳴也

門式院 上 兼 八

一五三 現六さえ増るいふきか高の山嵐に氷果たる余すの内海
一五六 夫木よこの海にさくづなげんこ女子あまの羽衣はつらんやそ
一五七 同 余古の海を君をみしまにひく綱の目にもからぬあちの村鳥
一五八 草庵集このねゆるよこの浦波水おてけさ河による船もなし

好忠 西行 領河

横走

駿河

兼盛

横河 洲 兼

近江 類考

一四三 秋集横はしり清見関の通路にいついふとほなかくとてあつ

呼坂

同

兼盛

一五九 拾玉けふ思ふ驚の御山の月影のよかほの水にうつるしるしも
一六〇 夫木むは玉のよりの舟のかりには深に住魚のかくれなき哉
一六一 同 へしかれよ河の形のたぬしめてみりりの洞に移す水くま
一六二 同 かさならす横河の洞の水差によそのあるそとそとすく覧
一六三 同 よそに聞波もさへとかさ流す横河の洞の杉の下水
一六四 同 来る夜の横河の水のうす水とけす成行冬か空哉
一六五 同 せいとふ端と思ひしよりにてあやなく君も恋渡る哉
一六六 斬妻来秋風や八重た(雲をほら)龍横河の水にすめる月影
一六七 草庵集奥山のよ河の峯の花盛やへた(雲と)猫やみゆ覧

行真 律師 兼 師 為 兼 同 同 同

一四三 万十四東路てこのよみ坂越かねて山はぬんも宿りてむしに
一四四 同 東路のくの呼坂越ていほあれば恋んが後はあひぬ共
一四五 名奇ましらも遠方への声かはせ有し倦るたのよみ坂
一四八 夫木いほは信鳥も鳴也東なるくの呼坂誰かこゆらむ

無名 人丸 紫式部 光俊

一六八 三 万七 青みつとよきみの原の人にあへるかも石走 近江の物懸せん
一六九 三 名奇 近江てふよきみの原を行入は妹あつたりのとかならむ
一七〇 三 玉吟上 行くす依綱の原のよせにしてたれかあふみに人を契覧

同 同 同

餘綾淡

相模

無名

一六三 斬妻来 秋風や八重た(雲をほら)龍横河の水にすめる月影
一六七 草庵集 奥山のよ河の峯の花盛やへた(雲と)猫やみゆ覧

同 同 同

横山

武蔵

無名

一六三 万七 青みつとよきみの原の人にあへるかも石走 近江の物懸せん
一六九 三 名奇 近江てふよきみの原を行入は妹あつたりのとかならむ
一七〇 三 玉吟上 行くす依綱の原のよせにしてたれかあふみに人を契覧

同 同 同

吉田

里村

無名

一六三 万七 青みつとよきみの原の人にあへるかも石走 近江の物懸せん
一六九 三 名奇 近江てふよきみの原を行入は妹あつたりのとかならむ
一七〇 三 玉吟上 行くす依綱の原のよせにしてたれかあふみに人を契覧

同 同 同

大嘗会御屏風歌近江国

一五二 詠藻 せく水も吉田皇にみふる由は兼て年へむ影そみえける
一五三 名奇 しくせねよした村の秋おさめ初はす稻のはかりなき哉

俊成 巨房

一七三 詠藻 君が代はよしみの村の民もみ春をまつとやいとせ立しむ
一七四 三 名奇 近江てふよきみの原を行入は妹あつたりのとかならむ
一七五 三 玉吟上 行くす依綱の原のよせにしてたれかあふみに人を契覧

同 同 同

余古浦 入江海

同

俊成

一七三 詠藻 君が代はよしみの村の民もみ春をまつとやいとせ立しむ
一七四 三 名奇 近江てふよきみの原を行入は妹あつたりのとかならむ
一七五 三 玉吟上 行くす依綱の原のよせにしてたれかあふみに人を契覧

同 同 同

一五三 詠藻 四方の海も風静にせ成ぬらし声おさまれりよこの浦のみ
一五四 夫木はててやまの入江に波はれて月よりうへに松風も吹

和師 法師

一七三 詠藻 いく千世の秋か住さ菊の花白みまつすよし水の里

同

夜中湯

同 藻塩

一七三 万七小夜更てよなかの湯におほしくよひし舟入りけんか

無名

一七四 同 九旅にあれば夜中をもして照月の高嶋山にのしくおほしも

同

横田山

近江 藻塩

一七五 名奇はや過よ人の心も山山みよりのはやし陰にかくれて

長明

右東方へ罷ける時近江國横田と過けるに読るとなん

一七六 丈夫横田山いしかはしの逢生に秋風寒み宮と恋ししも

鴨長明

横野

上野 類考

一七三 万十紫の根はふよ野の春の庭君もかけつ紫はなくも

無名

一七四 山象集重咲横野のはな生ねれは思ひく人にやよふなり

西行

一七五 吟とむしそきのねはふよ野の春駒は草のゆかりになく成けり

家隆

一八〇 夫木春のくるゆかり成らん紫のねはふ横野に鶯のなく

顕朝

一八三 同 白露もうつりにけりな紫の根はふよ野の秋萩の花

行實

一八三 同 ことかたにねはふ横野の草がたこれと絶に始成ける

公朝

一八三 千首紫の根はふよ野はこかとゆかりの色にすみれ咲也

為尹

一八四 名奇さもことほうらふかからぬ紫のねはふよ野の秋萩の花

中務

一八五 同 紫のねはふ横野のまじりす声の色へむつましき哉

公景

吉野

丹後

一八三 万十二浦のわくよしの舟つさあつてしくかけて思はぬ月も日もし

無名

与謝 浦海浜 同 類考

一八三 同 霧はらよよの浦松はのくヒタ日とれる山の入りみ

兼昌

一八七 象集為に渡しよめけんよの海の浦松もふる天の橋立

能宣

一八八 堀百はしたてや与謝の浦浪ませてくる眺かけて千鳥鳴なり

仲夾

一九〇 同 後ぬれ衣今せばつかにかけてはすかつてえりよよの蜚入

兼昌

一九〇 六百番よの海の沖つ塩風浦にけ松なりけりも人にかた見

女房

一九一 秋三与謝の浦や塩風松にはらふなり清き月夜のほるかな影

後鳥羽

一九三 拾玉よの浦に千鳥しは鳴夕されにあり衣なる松の風かな

慈鎮

一九三 同 うまねする衣はなごころの程更てよの浦松風うらむせ

同

一九四 同 月影によの浦浪更行は松の風えよ鳥啼なり

同

一九五 同 興つ風に与謝のうし松音更てぬ覚悲しき楳枕かな

同

一九六 同 春のきて明行よの浦浪も幾重かたむ磯の松風

同

一九七 同 与謝の浦はとりうまねの楳枕たに我ためあふ千鳥哉

同

一九八 一子抄眺やよの磯の松風に衣かさねよ与謝のうし人

頭仲

一九九 名奇わかめらよの海霞ねとあまにはつれよの浦風

鴨長明

二〇〇 同 してするやよの浜と恋しけれ渡をよするかなしけり

上志人

二〇一 同 明方のよの磯よに舟とめてかたふく月と浦もにぞみ

行家

二〇二 同 打する身はの有てよの海のあそひの浦に比とへわらん

行家

二〇三 同 与謝の海の内との姿にうしてよみ渡る天の橋立

後京極

二〇四 三月清塩風のよの浦松音よと月影よと興つしし波

後京極

二〇五 夫木よの海の春のうら見渡せばとやの庭にわか刈はす

門院

二〇六 同 ひかたふくよの浦波高せし灯の千鳥むれてたつせ

師光

二〇七 同 与謝の海に鳴かくれ行釣舟の行ふもしらぬ恋もする哉

俊賴

二〇八 同 浦嶋やよの旅ねの秋の空日かなくあけしなほひのみか

鴨長明

二〇九 同 よの海の泉即のしわざとみし物をもも我やとたたる塩かな

泉式部

二一〇 同 霧はらよよの浦松はのくヒタ日とれる山の入りみ

後九条

二一一 同 よの浦にむらたてる姿椒はなかくたなき恋もする哉

兼昌

二三 同 汀なるほあひにまか山茨椒はよしとやゆゆるよさ浦人
二三 同 みまこなる沖のしづ洲に塩こえて夕波あるよさの浦風

丹後 藻塩三島

二三 藻塩 汝の名に君か齡あらはれて長閑き波も代る声

能野 山川 出雲

二三 類聚 八重立山ものしりか黒髪はよしの河の奥になつてふ

二三 七帖抄 山まはにしも霧なやましの野の山の嶺にたな引

吉忠森

未勘

二三 名寄 よしたふ杜の下草年をへてしけりさかりにみゆる宿かな

与奈津河

同

二三 六帖五下つ河も瀬定めぬ世と聞はれもふかくは頼まれせぬ

与古杯嶋

同

二三 堀 巨つこね嶋下は生るさかり吾露かこらねとはくよもなし

二三 〇 八首 よしね嶋首むす巖若か代に千度せなる天の羽衣

呼子山

同

二三 三首 名にたぐるよまの山の呼子鳥はや鳴出ぬ春来りして

横雲山

同

二三 夫木 空より花の尾上は明過て松原くしよ雲の山

二三 三 同 雪こくる木の間の空もほのと花をたよりの横雲の山

新玉津嶋

山城 類考

二三 新 純今にに移すも高き宮のなまとの渚の玉津嶋姫

二三 五 同 頼むぢ我藤原の都より跡たれせめし玉津嶋姫

頭仲 二三 新後拾玉津嶋手向るからに言の葉の露にもみかく色やゆゆるん
道師法 二三 七 同 古跡のくもの糸すも代もかけてたえぬ言葉の玉津嶋姫

光清 124
為重

大覚寺

山城

大覚寺のたきとくを見てよみ侍ける

順徳院

二三 八 同 後拾あせにけりいたはる境ノ瀬のはくそ人ほみなるへかりける

さか大覚寺にかりてこれかれ歌よみ侍けるに流侍りける

負隆

竹田

原里河原

同

藻塩三記伊都

公任

頭仲

二三 〇 万四 打渡す竹田の原にたく田鶴のまなく時なし我恋しくは

木造

二三 堀 後心から竹田の里にふしなれて幾夜くらげにはかりねらん

湖師

二三 名寄 ふき夜の竹田河原の旋車 晚かけて声と聞ゆる

有象

二三 夫木 いそぎする竹田の里の早苗がふし立てににおひやしね賢見

有象

二三 同 長き夜の竹田の里の蒼うきにしけきねもや鳴らむ

有象

二三 同 セリかばや竹田の早苗さるみはよの浮しの敷に取野見

有象

二三 同 冬寒みたる鳴なる打渡す竹田の原の長き夜すから

有象

二三 玉針 旅ねする竹田の里にう衣一夜の程に聞せむれぬる

有象

二三 八 同 千首 打むれて竹田の若むみくし帰るやもさ伏見成らん

有象

二三 三 同 拾遺 無名のみ高雄の山といひ立る君はあたこの嶺にや有しん

有象

二三 〇 玉葉 高き山清滝川を谷に見て谷陰めくる松の下の道

有象

二三 一 同 夫木 御狩する高雄の山に立雉や君か十年のひつ成らむ

有象

二三 二 同 分のける行てのさしの高雄山たもらうつる若つし哉

有象

二三 三 同 八条の
おはる君
冬基
頭輔
為相

有象

二三 四 同 分のける行てのさしの高雄山たもらうつる若つし哉

有象

二三 五 同 分のける行てのさしの高雄山たもらうつる若つし哉

三三三 同 夕去は衣手寒し高岡の山の木毎に雪を降たる
 三四三 同 廿 高岡の尾花吹す秋風に紐ときあけなむくすとも
 三五三 同 天雲に雁そ鳴なる高岡の萩の下葉は紅葉あへんとも
 三六三 同 女郎花秋萩のき梓屋の露分はん高岡の野そ
 三七三 同 宮への袖つき衣秋萩にははなよろしくも高岡の宮
 三八三 同 高岡の宮のすそみの野つがさきに今咲らん女郎花はも
 三九三 同 たがまとの秋の野上の朝霧に妻喚をいし出立さんか
 四〇三 同 高岡の野の上の宮は荒にけりたしき君の御代はそけりは
 四一三 同 高岡の野へは山鳥の末つみに千代に心ん我大君かも
 四二三 同 大君のつぎあてつ高岡の野へみ毎にぬみしなかに
 四三三 同 三 象果高岡の野へ秋萩ももては君形見とみつ忍はん
 四四三 同 堀百なましの野を過行は秋萩の花すり衣さぬへそなき
 四五三 同 同後高岡の山にやたつ白雲は空にひらひらこそすれ
 四六三 同 六 百 象 秋といはさしても物の悲しきは夕風立ぬたがまとの宮
 四七三 同 拾 玉尋くる高まとの山の花さかり雲とみつのは空目せけり
 四八三 同 万 代 高 岡 の 山 の 滝 瀧いほに君にたてもぬる袖哉
 四九三 同 月 清 古 跡 は 震 び ぬ 高 岡 の 尾 上 の 宮 の 春 の 明 け の
 五〇三 同 玉 吟 上 高 岡 の 尾 花 に 風 は 泣 け り け り 白 雪 で 降 し け
 高岡 山峯社名 大和 類考
 川原神里
 三五一 万七 葛城の高岡の草のはや知てしめさましも今そくやしき
 三五二 象果高岡山若ねに生る音のねもころく降をく白雪
 三五三 山象果園をく心もくして郭公高岡の山の嶺越ねなり
 三五四 拾玉あなならぬ花へよとめを人とは高岡の山の入重の白雲
 三五五 名奇白雲はよそに見えず葛城や高岡の月は風吹なり

同	三五三	同	ながめやる雲のはたてや匂くらん高天の嶺の花の盛は	但馬
大楨	三五七	百首	行人の手向も見えず高岡川女つみなむと五月雨の比	行家
清丸	三五八	現六	あざとかるけ山はなこしのほら草高天の原の神とみせへ	隆祐
大持	三五九	万代	文堅の高天の杜の時雨てや雲のはたてに錦をらん	教経
同	三六〇	名奇	よそにみる高天の杜の五月雨に雲よりつた郭公哉	隆祐
同	三六一	雲葉	鶯の声も高岡の宮木守山にしめゆふ昔こふらし	行能
同	三六二	月清	かつしきの嶺の白雲はほらなり高天の山の花盛かも	後象極
同	三六三	玉下	心こけて行てもふらぬ葛城や高天の桜匂みよせよ	隆祐
今城	三六四	天木	根する高岡の桜匂へとも雲々のよそに帰る雁金	為家
大楨	三六五	同	雲をまで行螢かとも見えつら高岡の山はともし成けり	俊成
大楨	三六六	新六	よせなれと高岡の山の山彦は雲にきたふる声せかくれぬ	行家
大楨	三六七	天木	やまよつよもの神たち集れり高天の原にきたたかして	鎌倉
大楨	三六八	御集	至高岡の山に雪消て来し風は春のはつかせ	後鳥羽
大楨	三六九	建保	かつしきや高天の桜霞むともよそにまかへ嶺の白雲	内兵衛
大楨	三七〇	天木	いせけりとも高岡の里に放ねて山時鳥はるかに聞	藤益行
大楨	三七一	万	かく討恋つあしすは高山の若根しまきてしなまし物を	繁姓
大楨	三七二	近言	の狂言とかも高山のいはほの上に君かふしたる	皇后
大楨	三七三	万	八 高 山 の 音 の 葉 し の き 降 雪 の け ね かいふも恋のしけうく	丹生
大楨	三七四	万	十 小 衣 更 出 出 入 月 を 高 山 の 峯 の 白 雲 か くて 人 か も	丹生
大楨	三七五	万	丁 万 丁 わ か ゆ へ には け し 妹 は 高 山 の 嶺 の 朝 霧 過 に けん か も	無名
大楨	三七六	同	高山の歩行しよの友おほみ袖すりこねも忘ると思ふな	人丸
大楨	三七七	同	高山が若もと滝も流水の音にはたてし恋てしぬとも	同
大楨	三七八	同	廿 山 の 巖 に 生 る 音 の ね も ころ く 降 を く 白 雲	左大臣
大楨	三七九	名奇	青山の嶺ふみならすとしこのほらん道の末せはけりき	定春

三八〇 柳六今もかまも高山にてしす日にその五時の初をとしら
尤俊

三八一 名寄高山のたかへせわたるたりくわにわ狩君もまら出らかも
彦隆

三八二 同 高山にちみろの海も残なくほふに袖の我ごころかな
同

三八三 万二橋の嶋の宮にはあらずも佐田の岡へはとのみしに行
倉人等
197

御門 同 万葉集天和國曹歌中
倉人等

三八四 万二ひんかしのたきの御門にさもらへと昨日もけふも召事もよし
倉人等

三八五 同 一日は千度まいりし東の滝のみかたとをぬておとも
同

高市宮 同 藻塩 和名高市郡
寂達

三八六 万代しとさりし青さへぞ恋しけれたかちの宮に月を詠て
同

玉井沼 同 藻塩
相模

三八七 良玉敷嶋や玉井の沼のあやめ草つらぬく世のわざとせぬれ
同

玉水滝宮古 同 名寄歌枕三当国
人丸

三八八 万一此山のいやたふかし玉水の滝の宮古はぬれとあかぬかも
人丸

三八九 名寄月影の宿りてぬかく玉水の滝の宮に秋風を吹
光明

三九〇 天木今ははや水もとけぬ玉水の滝の宮古は春めさぬらん
光明

三九一 羊麁たえくに軒より落ちる玉水の滝のみやに春雨とせむる
頼阿

高野原 大和 八雲御抄
長屋

三九二 万一秋されは今もみること妻恋に鹿鳴山と高野原の上
子長屋

三九三 才代見渡せばたかの野へのうつつ木原皆白妙に咲にけらしな
文逸

手向山 同 類聚近江有同名

三九四 柳集白妙にひみきにけらし木綿置手向の山に花や散見
行志

三九五 同 桜咲たむけの山に風吹は木とにたかるとよそのゆふして
行志

三九六 同 おしめともぬきに散かふ花なほや手向の山の春の夕風
走衛

三九七 同 さは姫心にせめて手向山やしく花の春の錦を
俊成女

三九八 同 春はまた花の錦も手向山ぬきと散かふ神のまに
内侍

三九九 同 吹風を神やいごめる手向山とれはかてる花の錦を
範宗

四〇〇 同 春を祈る手向の山の山風にけし散花は神のまに
康光

四〇一 愚年たつ嵐にけし神に手向山花の錦のかたも定めぬ
走家

四〇二 玉上 一声は手向の山のはとさすぬきも取あへず明る夜半哉
彦隆

四〇三 同 秋色にたもやはかがる手向山霞の夜花のにはきは
同

四〇四 同 神無月たれに手向の山風や紅葉の錦しはしとめよ
同

四〇五 万手集歎かし手向の山の子規青葉のぬきも取あへぬまて
俊頼

四〇六 同 手向山霜も時雨もせぬて紅葉にあける神無月哉
光明

四〇七 夫木さは姫に霞の袖手向山みだすな嵐うすき衣を
忠走

四〇八 同 佐保権に花の白ゆふ春かけてもか手向の山風を吹
有妻

竹原石井 大和 藻塩
光俊

四〇九 名寄竹原の石井の水やあまるとん龍田の山の五月雨の比
光俊

四一〇 良玉恋侘ておつる泪の積りてやあはねたえまの池と成らん
彦隆

四一一 天木あふ寺は絶間の池の柱若へたる中も成やしお見
大奈茂

絶間池 同 藻塩三当国或撰津
常陸

高松山 野 同 藻塩 式井決

- 四二 春集春面のしきくも高松の山桜はいかあるらん
- 四三 同 雁金を聞つるなへにたか松野への草葉そそ色付にける
- 四四 大木里ことに霜は置くし高松の野山おなじく色付ぬれば
- 四五 同 ぞよは衣手来し高松の山の麓に雪はふららし
- 四六 同 もつとも千世をなごせるためしかな鶴のき宿る高松の山
- 四七 名奇録なる高松山もそよははくし年の雪積る覧

辰市

- 四一八 六層番たの市や日を待賤のそれならはあすしとぬ身にやあはれまし
- 四一九 建保辰の市うるまの清水庵登て人の心くまも残しす
- 四二〇 同 玉はよふはくの辰の市にくるれば帰る数もみえけり
- 四二一 新六時じあはたのちのしちあくさけ共花をうるまもなし
- 四二二 五上辰の市や十年もかけてくる民もくいの都は我君のため
- 四二三 同 行帰りよもふる民も辰の市やしおふる身を物悲しき
- 四二四 同 下名におひて風もけふよりたつの市や立あそふ袖ぞ涼しき
- 四二五 大木雲せはき日影にのほるたつの市ゆるまもなき人を恋つ
- 四二六 同 いたりにけふも暮な辰の市日すへぬさ都人かな
- 四二七 同 辰の市うるまの清水涼しくて今日ほひあめ心もそすれ
- 四二八 同 たの市竹がふんにくれゆけはうるまの清水影もとぬす
- 四二九 草葉集龍田山夜半に越ける程みえまた朝霧にたつの市人

多能武池

大和

八雲御抄并藻塩三当国

- 四三〇 夫木おり立て引ちつさんけふのみのみたのむの池に生る菖蒲を
- 四三一 夫木朝なくたつ朝霧の来きかもたかはら山の紅葉染けん

竹原山

同 藻塩三当国

表持 徒人 不知 匠房 俊光 同 走象 康光 順徳院 知象 家隆 同 行能 俊頼 知象 隆博 人丸

滝浦

同 藻塩三見り

- 四三二 万丸吉野り河波高み滝の浦を見すぞ成なん悲しまくに
- 四三三 同 高城山 初撰名所抄三吉野郡
- 四三四 現六天の原みれば高城の山桜空にたひ引雲はそれかも
- 四三五 玉玲下立のほる雲や梢に桜木の花ぞ高城の女吉野の山
- 四三六 夫木夕て日さすや高城の山桜花のひかりて空に移ふ
- 四三七 同 打なひき春さりくればみよしの高城の山に鶯の鳴
- 四三八 同 音に聞高城の山は名にらし雲ぬにみゆる嶺の紅葉は
- 四三九 名奇みよし野のたかさの山の花盛なるふ色なき物とこみみれ

多武山

同 仙實抄

太奈人良野

大和 類き

- 四四〇 抹手折たむの山霧しけきかも細河の瀬に波さほまける
- 四四一 才十九たろ手を取持て朝狩に老は立ぬたなくの野に
- 四四二 詠古白露の手枕野の女郎花誰とかはせる今朝の名残そ
- 四四三 新詠古手枕の野へ草葉の霜枯に身はならはしの風を寒けき
- 四四四 夫木敷たの手枕の梅花わての朝けの袖匂ふらし
- 四四五 長歌吉野河港かうもに高殿を高知ましてのほりたら
- 四四六 才一山河もよりてつかふる神はら港つかうもに舟出するかも
- 四四七 夫木みよし野の港つかうも春の風神代もかお花をみよきる

多芸津河内

同

元仁 経道 知象 家隆 後丸条 徒人 不知 経象 同 皇人 治部卿 船王 経平 本条師 光俊 人丸

同

前相

珠城宮 山 同 類字

- 四四八 玉葉まきもく玉きの宮に雪ふれば更に音の朝もて見る
- 四四九 號古日にみかく珠城の宮の梅花春の光とつやもさけけん
- 四五〇 同質池水に国がかける巻向のたまきの風は今ものこり
- 四五一 新十い秋光もてて置露玉きの宮に月もすむ見
- 四五二 夫木里入つたふ若根の道にえてたまきの山は雪降にけり

橘寺

河内 類字

- 四五三 万六橘の寺の長に我のぬし童女はなりは髪上らん
- 四五四 御葉下名だしふはしはしやしへ時鳥橘寺の夏多くれ
- 四五五 夫木古へにほる神の香まつし置花たはらなはな寺となしけん
- 四五六 千首名にししか橘の寺のさもあらて尾上の松に在明の月

高瀬 徒里川嶺

河内 類字

- 四七三 六帖こも枕たかせの徒にから薦のむるも我はしして頼まん
- 四八三 堀百いにしてまももかしん五月雨に高瀬の波の水増りけり
- 四九三 六音響着枕高瀬の徒に立鳴の羽音もそらやあはれかくせ
- 四九四 万代したさくたかせの川の波間より露や袖の姿成らん
- 四九三 名舟さしほる高瀬の里の徒にかよふ人なき五月雨の比
- 四九二 神道こも枕たかせの徒にささしてのほるも深き木末の声
- 四九一 名舟見渡せばすませき夜も高せ川ほとつに成ぬ五月雨の比
- 四九〇 夫木移り行棹に空はあなとめく花も高瀬の嶺の白雲
- 四八九 浪さけく冬の海やにらむ高瀬の波の五月雨の比
- 四八八 同 薦枕高瀬の徒にさすまてのさてや志路にしほればてなん
- 四八七 羊鹿さふけぬるかたせの徒にさす梅の音さへすめる月の影かな

竹河 同 類字 伊勢三同字

- 四六八 僅集たけり川の橋のつめな花園に我をほゆも七めとくはへて
- 四六九 集神代より色もはらぬ竹河のよも君にやれとて夜らん
- 四七〇 竹川巻竹河に夜もふかざしといとまきしもかななるふも思ひをまじ
- 四七一 同 竹河の橋うも出しふしに深き心のこほしりきや
- 四七二 同 たり竹のそよの事は思ひ出思ふばかりのふしほはけれと
- 四七三 同 流れてのたのみむなしく竹河に母はうき物と思ひ知にき
- 四七四 玉吟上 山吹の花さへ千代にいたふなりまかからる竹河の波
- 四七五 夫木後にまたれかきて見ん竹河やむすふしつくも紅葉もる山
- 四七六 七帖たはれとが声も更なる竹河の水むまには影もまじす
- 四七七 草庵竹河の測のみとりも白妙のよなく宿る月の影哉
- 四七八 又木竹川の千世とこめたる庭に出て起ふし君といはし諸人

無名

徒里極

- 四七三 堀百取つたり玉甲よ野のはなれ駒榴けたにあせむ花さく
- 四七四 玉吟上 山吹の花さへ千代にいたふなりまかからる竹河の波
- 四七五 夫木後にまたれかきて見ん竹河やむすふしつくも紅葉もる山
- 四七六 七帖たはれとが声も更なる竹河の水むまには影もまじす
- 四七七 草庵竹河の測のみとりも白妙のよなく宿る月の影哉
- 四七八 又木竹川の千世とこめたる庭に出て起ふし君といはし諸人

玉田横野

河内 類字

- 四八〇 玉葉龍田山嵐の昔もたがやすの里は荒れにほど答よ
- 四八一 名舟雲晴お伊駒の山のいかならん麓も雪の高安の里
- 四八二 同 白波の立田の山を越行は雪ふりむかふたかやすの里
- 四八三 新六高安の女もとは早くなれにけり女つかもけり女とせする
- 四八四 又木たせすにつりにけりな時鳥いまの山を越てかたらん
- 四八五 同 かうもめか手せめの衣打侘ぬ秋風寒き高安の里
- 四八六 同 雲かゝる伊駒おろし山風に衣うつるたかやすの里
- 四八七 同 くれねとて独立田の山の端に有明の月は高安の里

徒里

伊勢三同字

為伊

信実

師時 類字

高安 同 類字

信実

頼昭

信実

兼邦

信実

信実

為伊

信実

玉樓野 和泉 類考

- 四八三 斯拾終夜露の光をみかくなり玉のよの野の秋の月影
- 四八三 名舟雲まよふ峯の木枯吹ひき玉の樓野に降霰哉
- 四九〇 草庵上吹にけりもけはかつちる白露の玉のよの野の秋の初風

高師次 同 類考

- 四九三 象集身をわふる波は今もいひみなるたかしの浜にみつる塩也
- 四九三 懐中一和象なま高師の波しあれば信丈の里もあはれはれにけり
- 四九三 玉上うつ波のたかしの浜の真砂地に生ける松根ぞあまたなれ
- 四九三 行玉典つ波たかしの浜のまよ千鳥跡も走ぬ声聞ゆ也
- 四九三 夫木我志は高師の浜にわたつて尋て行ん方もふほえす
- 四九三 御集上恋すてふ名のたかしの浜衝なく帰る袖のあた浪
- 四九七 竹葉 おも浪かしの浜の松も独ねるはかりの名に社有けり
- 四九八 同 よる波も高師の浜の松かねのかほくまほき枕せけり
- 四九三 同 風あらし波やたかしの浜千鳥ふみ通ひこし跡も絶ゆる
- 五〇〇 同 まつたにへはかけてもしら波のたかしの浜に袖は沾つ
- 五〇三 同 なき名のみせにはたかしの浜松のつれなき色に恋や渡くむ
- 五〇三 同 志すてふ名の高師の浜千鳥のみや波ぞこゝろ鳴へき
- 五〇三 同 物思は波のたかしの浜松のまつもむむしき色にふりつ
- 五〇三 同 無名のたかしの浜の松かねにいかなる風絶す吹らん
- 五〇四 同 方寸塩風の音も高師の浜松に震てかゝる春の夕なみ
- 五〇六 竹葉上 沖つ浪たかしの浜の浜風に夜や寒かしし千鳥啼也
- 五〇七 同 下つ名のたかかし塩のぬれ衣袖まきはさん波の間もかな
- 五〇八 同 たのめくし人心を おき浪高師の浜の松せくらしき
- 五〇九 草庵上 風吹はたかしの浜のあた波をつはさにかけて衝鳴也

高津 宮 摂津 類考

- 不知 五〇三 才二 入方の天のさくある石船のはてし高津はあせにけるかも
- 家隆 五二六 百衣さけり行よこにそへてけり高津の宮の春の曙
- 頓阿 五二三 拾玉心なき人にみせはや霞しくたつ宮の春の明ほの
- 五二三 同 郭公高津の宮にくれはとりあやしきまての声の色哉
- 五三四 同 松風はいつくもおなじ声なるも高津の宮の秋の夕暮
- 五三四 同 古の面影見する聲かな高津の宮の松の梢に
- 五三四 同 夫木かしこきは難波の事もふはれと高の宮の氷至せけり
- 五三七 同 船とむる難波堀江にさかぬせればたかのみやと馬かも
- 五三三 同 荒にける高津の宮をきてみればよき虫やあるし成しん
- 五三三 同 夫木古の高津の宮の跡ふりて虫のねのみせ秋を忘れぬ
- 五三三 同 あれにけるたかの宮の浅茅原猫玉しきの村雨の露
- 五三三 春霜抄 春の夜の月に音や思ひ出る高津の宮に白ふ梅かえ
- 俊成 彦 田養嶋 撰津
- 内侍 五三三 濤標巻 露けさの昔にたる旅衣たみの嶋の名にはかくれす
- 知家 五三三 拾玉 誰か聞難波の塩のみつた(に田養の嶋の鶴の諸声
- 範宗 五三四 愚年をきあがす霜さかさなる旅衣たみの嶋はきてもかひなし
- 行家 五三三 冬上 霜つむ田養の嶋にすむ民の名にはくれぬ袖や寒くん
- 康光 五三三 同 下 雨はるたみの嶋に月さえてかさねて白き鶴の毛衣
- 清女 五三三 十中 音くはにめぬれぬ賤かきたみの嶋の雨の多くれ
- 公長 五三三 建保 難波湯たみの嶋に鳴鶴の霜をかきめる長き夜の声
- 妙光寺 五三三 同 麻衣田養の嶋にたつて鳴ははの茅のさやく霜夜に
- 守親 五三三 同 ふる雪におれてや寒き難波湯たみの嶋の鶴の毛衣
- 頓阿 五三三 同 旅人のほらふ杖も白妙の田養の嶋の雪の明ほの
- 角藤 五〇三 才二
- 柳文 五二六
- 慈鎮 五二三
- 同 五三四
- 同 五三四
- 師光 五三四
- 公朝 五三七
- 後鳥羽 五三三
- 陽長 五三三
- 法正 五三三
- 定家 五〇三
- 慈鎮 五〇三
- 行家 五〇三
- 同 五〇四
- 宮内 五〇六
- 行意 五〇七
- 走衛 五〇八
- 内侍 五〇九
- 知家 五〇九

五三三 同 鴨の鳴田裏の鴨も時雨つゝあし枯葉に秋風を吹

五三三 同 さかへゆくくにの田裏の鴨守も雪ふるみくみよあふくん

五三三 新大 雨せよ秋のたみの鴨隠れ住てふ葉も袖やぬる覧

五三五 夫木 打はしふ我袖かけてさえにけり田裏の鴨の雪の白夜

五三六 同 敷ふるたみの鴨の鳴やかた名はさほしすはらふ袖哉

五三七 同 雨による田裏の鴨のあま衣さらしては活ね冬の袖かは

五三八 千首 あまた友有ともさびし雨かふる田裏の鴨の夕暮の空

玉河 里者 同 類者

五三九 拾 玉川の里と聞しは是ならん月影さす八重の卯花

五四〇 同 卯花青葉か上に風みんてき波す玉川の里

五四一 同 つも垣花の盛に成ぬらし昔は波す玉川の里

五四二 五治百 浪の音は松の嵐に聞ゆなり卯花かほる玉川の里

五四三 連保 月月の秋雪あしたも卯花の面影たえぬ玉河の里

五四四 家 過かてに心移る玉河の影さへ匂ふ山ふきの花

五四五 愚 卯花に夜のみかりをてらさせて月にははらぬ玉河の里

五四六 月 清卯花は雲にもうとき月なれば波を立よ玉川の里

五四七 夏 夏空くもれるよはの卯花の月もやとせる玉川の里

五四八 同 むし雨に露をま凌す卯花の垣ねつゝや玉河の里

五四九 同 うの花や灯をけて咲ぬらん浪よせまざる玉川の里

五五〇 同 玉河の岸の卯花咲ぬれば汀にしね波きたらむら

五五一 同 浪やたつ雪やつもると卯花の咲まかへたる玉河の里

五五二 同 卯花の垣ねはかりは春やとて草のなまぬ玉川の里

五五三 同 玉河に月のしかりみかけてけり入影みせぬ卯花の比

五五四 同 光さす里を尋てすむ月の影をみかける玉河の波

兼宗

五五三 御集 心あれやさ夜更かたの時鳥まづに鳴なり玉川の里

俊鳥羽

行家

五五三 草庵 ぞしてたに月かと思ふ卯花を露もてみか玉河の里

嫡阿

知家

五五七 玉計 もり出る音にて聞卯花のしつえしらも玉河の水

忠度

忠直

五五七 玉計 もり出る音にて聞卯花のしつえしらも玉河の水

忠度

俊茂女

五五八 繁集 ありのほる人のためと愛ほしも跡さたる女の縛り玉垣

俊頼

順徳院

五五八 繁集 ありのほる人のためと愛ほしも跡さたる女の縛り玉垣

俊頼

為尹

五五九 才七 命幸又しきよしも若せく垂水の水を結てのみつ

無名

慈鎮

五六〇 万八 若せくたるみの上の早蕨のもえ出る春に成にけるかも

無名

同

五六三 鏡古 さらみの今は折にや成ぬらん垂水の氷若せく也

俊頼

同

五六三 名 奇若せくたるみの上にさす日影打解にけり春の初空

志御門

象隆

五六四 同 けさみれば垂水の上のうす緑せれかとはかりもゆる若草

俊成

同

五六五 夫木 つらふしたる女の杜の早蕨の折にたはやは人のさくらん

俊成

走家

五六六 夫木 つらふしたる女の杜の早蕨の折にたはやは人のさくらん

俊成

同

五六六 才一 大伴の高師の波の松かねを枕ねねと家らしのはゆ

兼人

俊兼極

五六七 愚 草あた波のたかしの波のせなれ松おけすはかけて我恋あやも

走家

俊鳥羽

五六八 夫木 大ももの松のはなぬも枕にて高師の波のまろねしてけり

隆季

季能

五六八 夫木 大ももの松のはなぬも枕にて高師の波のまろねしてけり

隆季

寝蓮

五六九 万七 三嶋江の玉江の草をしめしよりをのかと思ひまた刈ねと

人丸

良平

五六〇 堀 白霜かたて花は散ぬとみししも玉江の草は冬絶せぬ

匡房

花良

五六三 同 まこもかる玉江の蘆も霜枯てふかくも冬の成にける哉

回信

最連

五六三 歌 合ひしうにささる布とみえつろは玉江の草の花にぞ有ける

頼綱

走家

五六七 名 奇みもりに蘆の若や萌ね覽玉江の草をあさる春駒

俊兼極

俊成

五七四 月 清よもかさね玉江におる雁の声あし月の月に立空やなき

俊兼極

五七三 愚羊わかめし玉江の芦のまもへてはからねと見えぬ五月雨の比

五七三 同 下かりねせし玉江のあしにみかくれて秋のとなり風を涼しき

五七三 玉上 三嶋江の玉江のまこも徒にからて日もふる五月雨の比

五七三 同 沖つ鳥荒行夜半は三嶋江の玉江の芦間しめて鳴也

五七三 類 聖しとしま玉江の沼のあやめ草つらぬく千世教とぞみれ

五八三 犬木 ぬかきもりあしの玉江にふり立てひけさあやめはねもはるか也

五八一 同 風氷る玉江のあし猶さえて春の霞も立空そなき

五八二 犬木 玉の江に生るあやめのねもみれば末の世長きためし成けり

五八三 御集 上陳もりし玉江の蘆はそはたて涼しくやとる夏のよの月

五八四 建保 冬の日は氷のひまよみし玉江の月のあがすみぬる

五八五 同 蘆の葉はまはらうも若き三嶋江の玉江の波に春やよる賢見

太刀造江

摂津 類き

五八六 堀 直はつへうす玉おす取とへていし待らんたつくり江に

五八七 後拾 万代も君か守と祈りつたもつり江みしらしとを見よ

高浜

同 類き 伊勢 第三 有同名

五八三 統 古きてみれば千代もへぬへし高浜の松にむれなる鶴の毛衣

五八三 新 大高浜のまきこにだてる松のわのうへむいらぬ我心かな

五九〇 夫木 いくとせ雪もいはん白妙に名も高浜の秋のよの月

五九一 同 さか行つかさ位はたほほまのちとせの春をまつししむん

玉坂 山池

同

むしがたらしし人のとしころありて津のくに

たま坂といふところにありけるを聞けてよ

かりあひて多くれにすくむし鳴ければよめる

定家 五九三 春集なまきかたけふあひみれと鏡虫は音なかにの声を聞ゆる

同 五九三 六百かたらしし我恋まや郭公たまさか山に声のほめく

家隆 五九四 拾玉あひみてもまた行程の久しきは玉坂山になく郭公

同 摂津 玉坂といふ所に住たりけるに安部卿

相模 親 玉元良かよはずむりにければおはしけるもかん

俊頼 五九三 万代してしまむらなむ玉さかたまさかお思ひ出ても哀とはいはん

中務 五九三 名奇いにせんをのかさ月を待たても猶玉坂の山郭公

経仲 五九七 玉吟春風に今は水も玉坂の池のおもてはさよ波をたつ

俊頼 五九八 類 聚落世にはありえん事も玉坂のいけしんとたに思やけする

内侍 五九三 夫木 時鳥いくよびくもまたせ玉坂山に鳴りたるらん

玉造 名奇歌枕 直越

六〇三 名奇住吉のなごしの陶の玉つくり数ならぬ身は秋と悲しく

同 直越

六〇三 万六たこえの比道にして押照や難波の海と名付けらしも

前太政大臣 玉出水

六〇三 統 後しらしの玉出水と手に扱て結ぶ契の末はにこしし

同 類き

六〇三 誰其森 伊賀 八雲御抄

六〇三 名奇さよ更てたれそ杜の時鳥なのりかけても過ぬる哉

六〇三 手節崎 伊勢 羨塩

六〇四 一たはさのたふしの崎にけふもか大名人の玉もかる賢

六〇五 出家集すか鳴やたふしのこいしのけかへてくらしうまで浦の波かせ

六〇六 同 ささ鳴のこいしの白もたか波のたふしの波に打よせてけり

同 西行

人丸

同

志見

顕昭

慈鎮

同

春隆

忠隆

六〇七 同 あはせはやまきとからすとききりたは手筋すや嶋黒白の汝

竹都

六〇八 名奇思へた竹の宮古は震つしめの舟なる御代気色を

六〇九 同 常磐なる竹の都の右なれば嬉しき山しきかそへてせしむ

六一〇 夫木竹の宮まきにうへて千代までも祝ひ初けん此君ぞこれ

六一一 新勅吳竹のよの都も聞からに君か千年のうたのみもなし

高浜

六一二 名集せの海はなかりたはなくあせにけり波たが汝も昔に聞えて

多計河

六一三 名奇たけ川やゆた野をみればは多くと山田の原の松はくもれり

多津我美坂

六一四 大木秋なればもほゆるかなすふ山麓と霧とのたがみの坂

滝原 古

六一五 夫木白糸の絶す落くるたきの原跡たれ初て幾世へぬしん

六一六 同 波とみる花のしつえのいは枕滝の宮にや音よとむ覽

六一七 同 滝の原ならひの宮の神たから猶すまづき與つ白浪

六一八 まむ滝の原に散てみたる花みればぬいたにあへ錦成りり

竹屋里

六一九 藻塩緑なる色もかはしてよのつねに幾代かへぬ竹のやの里

高師山 浦

遠江 類々

同 六帖逢事と遠江なる高師山たがしや胸にもゆるふもは

六二〇 類聚たがし山松に夕ぬるかささの橋本かけて月渡る女ゆ

六二一 堀後東路をけで文くれは蟬の君高師の山に今ぞ鳴なる

六二二 拾玉風吹は高師の山の白浪にひとあたりして誰かゆらん

六三〇 同 拾玉春の月もおほし空にや詠む覽高師の山の雲も遙に

六三三 名奇白浪のたがしの山の麓より真砂吹まき浦風せつ

六三六 同 若依の花のあた波り帰り越てたがしの春の山風

六三七 同 朝風に姿をいつる友船は高師の山の紅葉せけり

六三八 同 女が母いつる宿はげや高師の浦にゆく白波

六三九 同 はまな川入塩寒し山正風高師の奥も荒まざる也

六四〇 同 高師山花たに宿もおしすはた越のすけ山の行末

六四一 類聚は多くと高師の山に鳴蟬の声は雲の物にと有ける

六四二 夫木ふしのねは髪をかきりのを残はて高師の山にかへりみる哉

六四三 同 高師山はるかに女ゆる富士の根を行なる人に見てせしむ

六四四 同 たがし山越来てみれば汝松のすも遠き浦のへつみ

六四五 同 沖つ塩高師の浦の夕霞いろ汝名の橋も女ゆ覽

六四六 同 高師山紅葉をうらに吹風は今ひとしほの色染もや

六四七 同 田子浦 駿河 類々 越中 有田名

六四八 万三登みれとあかぬ田子の浦大君の女としかし女みつるかも

六四九 同 二とくわいて恋つあもすはたこの浦の暮ならまほまもかろく

六五〇 名集思ひ佐とのか舟く行を船田子の浦まてきぬといはずな

六五一 同 うと汝のうときにはあらずたこの浦の恋しからんを来てらんと

六五二 同 いとせ行たひの心や通ふらんたぬ日せなき田子の浦波

六五三 同 我恋はなかくあわね駿河なるたの浦なみやむ時となく

六五四 堀百紫のしき波よすとふゆるまで田子の浦藤花咲にけり

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

六四三 月清しそは志をするかのたこの浦うらみに浪のたぬ日はなし
六四四 玉吟さびたる田子の浦へ夏かけて苗代水に入せくしし

六四六 愚半田子浦の浪もみらに立雲の色われ行春の曙
六四七 三十五 白妙のふの高根に雲はれはこほらて来る田子の浦浪
六四八 新六 たこの浦はふなし畑によもなれて塩やく霞たかきとみる

六四九 犬木朝日す田子の浦波たぬ日はあらがなきかのとらの波松
六五〇 同 あさ氷にはもかまはず成にけり何とよすらん田子の浦波
六五一 同 朝霞こしらもみえず立ねれば音にぞまけたこの浦浪

六五二 同 明ぬとも思ひわかしむ田子の浦の霞のうも舟のあまへ
六五三 同 船とむるたこの浦はの夕墟に富士の御獄は霧とめてけり
六五四 同 たこの浦波に霞の色もへて春 漆に在明の月

六五五 建修田子の浦に時せともなき波よりも春は霞のたぬ日てなき
六五六 同 田子の浦やなききたるあさの春の日に霞と出るあまの釣舟

六五七 名奇竹の下しはし立よる程たにも落ふしけせをいにせん
六五八 統拾足柄の山の麓に行暮て一夜宿かる竹のした道
六五九 風雅あしから山のあくしの跡とめて花の雪ふむ竹の下道
六六〇 同 深き夜に関のや出て足柄の山もとくま竹の下道

竹下

相模 類き

立野山

同 菜塩

秋浦

同 菜塩

六六二 同 なれて見し秋の浦のかみあらは千鳥の跡を絶すとはん

後葉菴

立野 原牧

武蔵 類き

走菴 六六三 六帖相坂にひくしん駒を秋霧の立野がもてはまほしけれ
讚岐 六六四 犬木夕霧のた七野の駒を引程はすかに見えす関の杉立
行家 六六五 三吟行まに立野の野への霞がわくこやよとの人は見らん

桐政 六六六 犬木旅人の立野の原の唐錦をとりはさす秋萩の花
第三 六六七 同 小男鹿の立野の原のはし紅葉声はくまで吹立哉
家隆 六六八 同 は多くしたも野の牧にひく駒のなつます越お相坂の関

師仲 六六九 方集春霞立野の薄角くめは冬たもなつむ駒をいはゆる
兼金 六七〇 上集 今も猫秋みし花の面影にたつ野の原の箱の下草
急鎮 六七一 名奇さほしかたも野のまゆみ色付てやははた寒く夜は成にけり

内衛 田能 武沢 里 同 八雲御抄并類聚等当国
康允 六七二 類聚忘らなよたのむの沢を立雁もいひは風の秋の夕暮

長時 六七三 犬木秋の雁風にさよふて越路より誰をたむむの沢に鳴喚
初王 六七四 同 今んと秋とたむむ人も待たぬあや初雁の声
為相女 六七五 同 今んと秋とたむむ人も待たぬあや初雁の声

類成 六七六 連採百日に女かき風に女かける尤かな長閑すあま玉河のさ
六七七 同 手作やさし垣ねの朝露をこほきとむる玉川の里
六七八 同 玉河にさしす手くりの更に世を頼む日影の哀過行
六七九 拾遺 玉川のさしす調布とらへに昔の人の恋しきやひせ

玉河 里

武蔵 類き

高間浦

常陸 類き

貫之 35+

俊成

家隆

公朝

香経

通平

順阿

有家

俊平

順徳院

家隆

不説人

六八〇 眺古よにみて袖やぬれんひたなる高間浦の興白波

俊憲

田辺磯

常陸

六八一 懐中ひたるたなへ磯にいかして風もかぬに浪の立見

不知人

六八三 夫木いつとしてふみまよとせざる玉つさもこはたなへ磯になく

同

玉井里

近江 類考

六九三 夫木霰の原に御狩して天みまのにたてまつる

俊憲

玉横山

同 藻塩

六八三 万廿あが駒も山野にはかとりかて玉の横山かゆかやん

同

六八四 堀白明方のみ空のほかに朝公玉のよこ山鳴て過なり

同

玉河

同 類考

六九三 千載あすもん野路の玉川抜越て色なる波に月やとりけり

俊頼

鷹尾山 峯

近江 類考

六八三 類聚今こは聞もあはすれ雉子鳴ももの高ねはたかの峯かも

同

寛治元年大嘗会屏風

同

六八三 斬まてや帰るたかふ山の玉椿霜はるふとも色はかはし

同

六八七 夫木御狩する鷹の尾山に立きしや君が千年のひつて成覧

同

玉緒山

同 類考

六八三 同 まししふのたかふ山の朝かりに霜打はるふ領の権米

同

玉野原

同 藻塩

六九三 詠藻霞しけき玉の原の秋さかり風も長閑にみゆる秋かな

同

六九四 夫木春深み玉野の原のほはれ駒やよみの草にまかせて見ゆる

同

高野村

同 類考

六八三 夫木青柳の糸にかはれる白露の玉の緒山に春雨そゆる

同

六九三 同 今そみる玉のよも山のおもとしてみちしかまふの野への聲は

同

高嶋山

同 類考

七〇三 藻塩秋といは光をもへて高き川の瀬の波も清くすむ也

同

七〇三 名寺近江なるたかつき川の底清み長閑き御代の影を移れる

同

七〇三 藻塩秋といは光をもへて高き川の瀬の波も清くすむ也

同

七〇三 名寺近江なるたかつき川の底清み長閑き御代の影を移れる

同

七〇三 名寺近江なるたかつき川の底清み長閑き御代の影を移れる

同

俊憲

俊頼

経光

同

同

仲光

衣陸

公朝

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

七二三 現六嶽へより出くる月を今みれば高嶋山に夜は更に行り

七二三 弘長茂あるす高嶋川の仙人はいとくとし木を(み)やせよと見

七二四 玉吟明ぬるかまた月影は高嶋のあしりの浦を出る釣舟

七二三 名奇三年(し)高嶋の宮柱としきまたて、後も方代

七二六 玉吟下月よし水ふみ分高嶋のこつ河上に宿はたつねん

七二七 夫木高しやあつ川柳風ふけはぬれぬしくにかさる白浪

七二八 同 高嶋山の林や咲ぬらん木におの白雲

七二九 同 たか袖によし移らん高嶋やかも野の家の秋萩の花

七三〇 新六高嶋や水尾の杣木の山くたしく(ま)せといひなやはする

七二二 夫木高嶋の遠一嶽へも漕舟のしげぬからは声はかかせ

七三三 同 高嶋やあつ河波に船とあてあすはちの原をゆかかん

七三三 新葉暮るまで若菜は(ま)し高嶋やかも野の原は宿もあらしを

七二四 同 吹おろす嵐の音は高嶋のみおの杣山雪降にけり

七二五 草庵五月雨に猫り音も高嶋や水尾の杣山雲ぞかされる

手向山

近江 類考

七三六 万六ゆふたみ手向の山をけふ越ていれの野に庵りせんすし

七三三 同十二よそどの女君を相見しゆふたみ手向の山を明日か越こん

七二八 類聚鳥居た相坂山のさかひなるむけの山よ我はいごめぞ

七二九 御業上今朝女は雪の白木綿かけてけり是手向の山路なるらん

玉松山

同

七三〇 名奇はる(ま)えしる(ま)御代ははま(ま)山に千世を(ま)て

田上山

川 近江 類考

七三三 万十二ゆふたみ田上山の(ま)る(ま)有(ま)りて(ま)あ(ま)し(ま)す(ま)と

知家 七三三 塩百たひみせの綱代に日も(ま)つ我(ま)へ(ま)する比(ま)な

俊光 七三三 同 あし(ま)る木に錦(ま)りかく由(ま)や(ま)杣山に木葉散らし

義隆 七三三 同 田(ま)や(ま)むし(ま)み(ま)にあ(ま)なく(ま)綱代木(ま)き(ま)て恨(ま)る

尤俊 七三五 同 風吹は田(ま)河のあ(ま)し(ま)る木に額(ま)の紅葉も日(ま)も(ま)て(ま)る

義隆 七三六 同 ゆふたみ田(ま)上(ま)川の綱代木(ま)の(ま)く(ま)に(ま)を(ま)も(ま)く(ま)す比(ま)哉

基俊 七三三 拾玉(ま)た(ま)か(ま)女(ま)綱代(ま)は(ま)冬(ま)の物(ま)な(ま)れ(ま)と(ま)て見(ま)ま(ま)夏(ま)の深(ま)み(ま)所(ま)を

為家 七三三 同 舟(ま)田(ま)上(ま)の山(ま)の木(ま)葉(ま)に(ま)時(ま)雨(ま)して勢(ま)田(ま)の渡(ま)りに(ま)秋(ま)風(ま)を(ま)吹

衣笠 七四〇 新六(ま)代(ま)な(ま)す(ま)田(ま)上(ま)の山(ま)の(ま)し(ま)る木(ま)は(ま)手(ま)治(ま)の川(ま)瀬(ま)に(ま)流(ま)来(ま)に(ま)けり

行家 七四三 同 せ(ま)と(ま)あ(ま)くる(ま)田(ま)上(ま)河(ま)の(ま)ほ(ま)り(ま)や(ま)な(ま)さ(ま)か(ま)ま(ま)く(ま)水(ま)の(ま)路(ま)ぞ(ま)わ(ま)つ(ま)ふ

権僧正 七四二 玉吟(ま)上(ま)た(ま)む(ま)く(ま)とも(ま)春(ま)は(ま)と(ま)ま(ま)し(ま)ゆ(ま)ふ(ま)に(ま)み(ま)田(ま)上(ま)山(ま)の(ま)か(ま)や(ま)な(ま)ら(ま)ん

成直 七四三 夫木(ま)里(ま)へ(ま)の(ま)け(ま)ぬ(ま)き(ま)か(ま)ふる(ま)衣(ま)手(ま)の(ま)田(ま)上(ま)川(ま)に(ま)負(ま)は(ま)来(ま)に(ま)けり

傾阿 七四三 同 卯花(ま)の(ま)咲(ま)に(ま)し(ま)日(ま)より(ま)ゆ(ま)ふ(ま)た(ま)み(ま)田(ま)上(ま)河(ま)に(ま)波(ま)ぞ(ま)立(ま)せ(ま)ふ

七四三 同 千早(ま)振(ま)田(ま)上(ま)河(ま)の(ま)清(ま)き(ま)瀬(ま)に(ま)千(ま)年(ま)を(ま)行(ま)る(ま)夏(ま)萩(ま)して

七四六 同 近江(ま)の(ま)海(ま)せ(ま)た(ま)り(ま)わ(ま)たり(ま)に(ま)か(ま)つ(ま)鳥(ま)田(ま)上(ま)過(ま)つ(ま)とも(ま)と(ま)ら(ま)つ

七四七 同 ひ(ま)を(ま)の(ま)よ(ま)る(ま)あ(ま)ふ(ま)の(ま)海(ま)も(ま)風(ま)寒(ま)て(ま)田(ま)上(ま)川(ま)の(ま)綱(ま)代(ま)う(ま)つ(ま)こん

七四八 同 網代木(ま)に(ま)錦(ま)を(ま)り(ま)かく(ま)田(ま)上(ま)の(ま)あ(ま)そ(ま)の(ま)山(ま)川(ま)木(ま)葉(ま)も(ま)る(ま)らし

七四九 草庵(ま)風(ま)寒(ま)る(ま)田(ま)上(ま)河(ま)の(ま)氷(ま)る(ま)夜(ま)も(ま)波(ま)や(ま)絶(ま)く(ま)綱(ま)代(ま)も(ま)る(ま)らん

七五〇 夫木(ま)う(ま)つ(ま)ろ(ま)は(ま)て(ま)た(ま)て(ま)り(ま)の(ま)村(ま)の(ま)白(ま)菊(ま)は(ま)さ(ま)て(ま)幾(ま)秋(ま)の(ま)露(ま)霜(ま)か(ま)へん

俊光

立入村

同 兼盛

七五三 名奇移ろはて庭よもしる(ま)と(ま)初(ま)霜(ま)にお(ま)ひ(ま)色(ま)なる(ま)玉(ま)の(ま)村(ま)菊

玉村

近江 名奇二り

無名 七五三 名奇移ろはて庭よもしる(ま)と(ま)初(ま)霜(ま)にお(ま)ひ(ま)色(ま)なる(ま)玉(ま)の(ま)村(ま)菊

無名 七五三 名奇移ろはて庭よもしる(ま)と(ま)初(ま)霜(ま)にお(ま)ひ(ま)色(ま)なる(ま)玉(ま)の(ま)村(ま)菊

玉津小河

同 藻塩

七五三 夫木みずもせく玉つをりのしなめに思ひ思ひよふかりせよ

俊頼

七六三 万六昔より人のいひくる老人の若ゆる水名におも滝のせ

大伴

田中村

同 藻塩

七五三 夫木皇のもしせの秋のはしめはななかの稲のゆきもてつ

俊頼

七六三 同 たと河の滝を清みか昔より宮仕りんたきの野の上に

大伴

高田村

同 藻塩

七五三 萬徳元あめの下かくとてはみあつはしやたか田の村はみね時やなき

匡房

七六三 詞花音見し垂井の水はほほしむと移れる影を年をへに行る

藤原

高見山

同 藻塩

七五三 正治物思は哀くるしかならなかなたかみの山に宮木引へ

陸房

七六三 夫木我袖のしくいやくくへ見んまれば垂井の水すくなき

為相

高御倉山

同 藻塩

七五三 天木萌出る時はきにけり若くくたかみの山の嶺の早嚴

仲業

七六三 百六た川の滝を清みる昔より宮かへけんたきの野の上は

大伴

玉陰井

同 藻塩

七五三 詠藻うこまひきたかみくら山祈まきつよざめん御代は神のまたく

俊成

美濃の谷汲に油の出るを見て詠侍りける

寛忠

高宮郷

同 藻塩

七五三 詠藻七夕に今朝ひく糸もひかれと若とぞ祈る高宮の郷

俊成

七六三 名奇そのまにやみなほつし侍濃路や高みの山の雲のよそであは

衣笠

高宮郷

同 藻塩

七六三 犬木高宮の里のしるしに白菊の花の雪もみみゆる成へし

俊成

七六三 懐中懐懐なうけり郡と思ふには誰かためめの里といふ賢見

肥後

玉造河

近江 犬木二当國

七六三 夫木いくちたひ若か御代にはあふみなる玉つくり河すまむとすしん

元輔

七六三 同 たのねによせつなはへてすれ共あたやしつのでかほまきに

無名

近江

同 藻塩

七六三 夫木いくちたひ若か御代にはあふみなる玉つくり河すまむとすしん

元輔

七六三 新秋古鳥の葉を吹夕風にうらふれてたこの入野に鶉鳴なり

季左

玉造河

同 藻塩

七六三 夫木いくちたひ若か御代にはあふみなる玉つくり河すまむとすしん

元輔

七六三 新秋古鳥の葉を吹夕風にうらふれてたこの入野に鶉鳴なり

季左

玉造河

同 藻塩

七六三 夫木いくちたひ若か御代にはあふみなる玉つくり河すまむとすしん

元輔

七六三 新秋古鳥の葉を吹夕風にうらふれてたこの入野に鶉鳴なり

季左

玉造河

同 藻塩

七六三 夫木いくちたひ若か御代にはあふみなる玉つくり河すまむとすしん

元輔

七六三 新秋古鳥の葉を吹夕風にうらふれてたこの入野に鶉鳴なり

季左

玉造江

陸奥

七九六 帖陸奥の玉つくり江に清舟の音にほたるす君ふる身は

七八〇 類聚塵の葉のしけみ露とぬきとめて玉造江に村雨と降

七八三 名舟くすり田の秋に結ふあやめ草玉造江に引はりけり

七八三 犬木月もす玉造江は露ふり氷ぬかける名にこそ有けれ

七八三 同 深もにいと船とめて今夜われ玉つくり江に照月をみん

武隈

同

七八四 舞舞おひとめしほもふかければ武隈の松にまの千世をならむ

七八五 畑たけくまの松の緑は政玉の年ともなふふく成らん

七八六 三条集まの程に又しかりけり行末のまた遠ければ武隈の松

七八七 同 武隈の松もとは枯にけり風にかたもふんふんさみし

七八八 同 年とへて誰もまつとが武隈のはなわにのみはりてたてを覽

七八九 同 たけくまのはなわにたてを松たにも我と独ありとやは聞

七九〇 粟葉かへりる松たき宿の武隈はみきとひびくもかひからまし

七九一 拾玉武隈のまはかなく時鳥二声とたながて過覧

七九二 同 武隈の松に心もなへてそ見きとは人にかたさへらなり

七九三 犬木たけくまの松に竹音とたそめて今朝は都に春初風

七九四 犬木武隈の松の梢に春と夏とふたきまをかけて藤咲かふる

七九五 同 武隈にいられたかへりくりりまのやけのまへに松たてるとか

七九六 同 郭公きくとほむに武隈のまにぞ夏の日教へぬへき

七九七 同 たけくまの朽にし松のあとに又誰植かへて千代をまきけん

七九八 新葉よせながらみきとほかりを架じて終に難面たけくまの松

七九九 同 つみにこそみきとはいはて武隈の松ならぬ身も年々へにける

八〇三 草庵 何事も見きといははん教ならして我身いそらに武隈の松

頼阿

多胡浦嶋

陸奥 藤塩

八〇三 懐中あまたな君の心を陸奥のたごの浦嶋恨てせむる

多波志根山

同

女らの国に平泉にむかひてはほしねと申山の

侍らにいと木はすくなくまやうにさくらのざりみえ

て花の咲たるもみてもみ付る

437

八〇三 山家集さくもせずたはほしね山の桜花吉野の外にかふるへしとは

西行

玉河

同 類家

八〇三 新勅陸奥にありといふなる玉川のたまきかたに逢みてし哉

八〇四 三統後五月雨は多塩ながら陸奥の野田の玉川浅き瀬もなし

八〇五 犬木里人や野田の若なとすく覧河とにころ玉河の水

八〇六 御集尤も野田の玉川月清み多塩千鳥夜半に鳴なり

八〇七 犬木冬されは野田の玉河水みて秋す波は夜半の白雪

同

為家

後鳥羽

玉星河

同

八〇八 犬木陸奥の玉ほし川のたまきに流あせやありとてまで

手結我浦 湯

越前 仙覚抄

八〇九 長歌ますしおのたゆひの浦に蕪乙女塩やく煙草まじり

八一〇 才三 越の海のたゆひの浦を旅にしてみればともしみ日本思ひつ

八一三 同 手結我塩女も渡さゆいゆかも悲しきさわかかり通はん

八一三 玉吟 逢専はたゆひの浦の松枕こかれそあかず夜半も塩火

八三三 犬木舟とむるたゆひの浦の明ほのに越路をさそく雁は啼也

不統人

444

全村

無名

家隆

泉冬

後村上

長親

行象

鎌倉

公朝

推經

長能

小大若

重之

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

玉江 沖 同 類考

八二四 名寺 白露の玉江の芦のよみくりに秋風もかくゆく登かむ

八二五 千五百夏月の玉江のあしや朽ぬらん浪に鳥ある五月雨の比

八二六 玉吟ふみしたき鳥たは絶ぬ夏かりの玉江の芦に飛登かむ

八二七 夫木 五月雨の長き五月の水深み玉江のあしの夏かりもせし

八二八 同 契や玉江の水に結ぶらん雁らぬ雁の若きゆせ

八二九 同 鴨のゐる玉江に生る花かみかよみかかしらぬ成けり

八三〇 夫木 秋ぶき玉江の淨のうき枕はいつくは月をみくらん

八三一 御集夏月の玉江のあしの下かくれなくや登かよまのもしは火

八三二 斬葉夏かりの玉江のあしのもとすかし待出る月は明の空

竹泊 越前 藻塩

八三三 山葉藻よすする竹のともりのすゝめ貝うれしき世にもあひける哉

八三四 夫木 こしの海の竹の泊を今朝ぬればひとよとこめて雪降にけり

武生国府 同 藻塩

八三五 催馬 道のたけふのこゝに我は有とよやにはかたれ心あひのかせ

竹浦 加賀 或類聚 越前

八三六 名寺 音てよく竹浦風吹たてまこにあそふ秋の雁金

八三七 天木 がりのこぬ日ありとも高ふらの山の雉子ほのとけけまし

高洲山 能登 藻塩

八三九 垂姫崎 浦 越中 仙童抄 二箇

八四〇 八千八 神さくらたるなる崎渚あくりみれともあがすいかに我せん

八三九 同 たる姫の浦も清くけし山の日はたのしみあへんひつぎにせん

八四〇 同 たるなるの浦もよく船提間にもはらのけきへを忘れて思(や

八四一 同 垂姫に藤浪咲て深清くし波さきしくくりに

八四二 同 立山 同 藻塩 三 新川郡

八四三 長歌 立山にふりもける雪ももたつたれともあがすかんからんらし

八四四 同 長歌 あまそより高き立山冬夏とわく事もなく白妙に

八四五 同 七 立山のゆきし春もはら(きの河夜せあふみ(かすも

八四六 同 多古馬 浦 同 類考

八四七 同 七 びしとるひみの江過てたこの鳴とひたもはり芦鴨の

八四八 同 八 たこの崎の春しけに時鳥鳴ともめはこたひあやも

八四九 同 九 藤の花白ふ盛はたこ浦はゆるし波の色もなつかし

八五〇 同 拾 玉 藤の花白ふ盛はたこ浦はゆるし波の色もなつかし

八五一 同 十一 浦の岸の藤波色ふか女松のしづえに興(春風

八五二 同 十二 波はふる藤は浪にぞかりけるたの浦の春かくれたた

八五三 同 十三 たの浦に藤咲ぬらんいそね松梢せめゆけ紫のゆみ

八五四 同 十四 磁百葉のしき波よすも見るまてにたの浦藤花咲にけり

八五五 同 十五 名寺 音よこしの山の時鳥たこの藤浪今そかりなり

八五六 同 早苗とらたの浦藤夏かけて苗代水に江せくて

八五七 同 五月雨は江の村もまかた軒までかふるたの浦なみ

八五八 同 玉吟(たきて二たひ聞したの浦に白ふ藤浪今も散らし

八五九 同 水底に紫ふかきかけみえて波に色(つたこの浦藤

八六〇 同 忠良

道行師

表持

無名

大持

大持

同

同

同

同

表持

同

同

同

同

同

同

仲実

表持

同

表持

家隆

忠良

田記文 梅丸

八五〇同 色ぶき藤波なびき見る人心をよするたの浦風

八五三 建保ぬれつもしぬてやふふんだの浦のそとへ白ふ春の藤波なび

八五三 同 たの浦の盛さへかけて白ふら浦の藤波にぬれてなき

八五三 同 行すまいたがぬためと折つらん波さかすすたの浦藤

八五四 同 あまのとり立袖や白く見藤波かゝるたの浦波

八五五 同 たの浦に咲や春への藤波のなみにはたつき花陰かは

八五六 草庵たの浦や汀の藤の咲より波の花さへ色に出つ

立嶋 越中 天木

八五七 夫木いとなく藻塩の畑たなは引さふる春霞かな

高倉山 丹波 備前松江三有同名

八五八 名高倉の山の麓の里なれば積もく稻の敷もしらす

多紀郡 同 和名三多紀郡

八五九 懐中なるまのこほりも今や春ならん心とけけたる言たかくなる

八六〇 才乙女しらかもなるはたうへとくもてわくけたく波渡よりみゆ

八六一 大木へしれぬわが恋なればく嶋のあまのもしほ絶ぬ煙は

大木 伯耆 智縁上人伯耆大山に参りて出なんとしける

あかつき夢にみえける歌

八六三 古山ぶかく年ふる我も有物といつもか月の出て行覧

高田山 石見 類考

八六三 拾遺なげやなげ高田の山の郭公此五月雨に声なほおしめや

具親 八六四 夫木関とめてせかひの水に種まきし高田の山は早苗とる也

順徳成 行意 八六五 拾遺石見なる高間の山の木間より我ふる袖と妹みけんかも

高間山 同 類考大和有同名

志定 八六六 才二石見の平高角山の木間より我ふる袖を妹みらんか

行能 八六七 新後拾石見湯たつの山に雲晴てひれく嶺を出る月影

八六八 夫木石見のや春の雪もる花盛高角山に風やしくらん

八六九 同 いは見のや高角山の時鳥この五月雨にぬれつと鳴

八七〇 新六たつ今たつちの山もよしと逢ぬ契に我とれゆる

高砂 辨尾上 播磨

八七一 家集いたつらにあいはけるかな高砂の松や我世のはてとたかん

八七二 家集人のと十年行まは高砂の松と我とやけふと暮さん

八七三 家集いぞのへむすひもしてん高砂の松にはよふ人十ながらん

八七四 家集すむ鹿のなかね時さへあやなくも戸たかかこと聞渡り哉

八七五 同 高砂の尾上の杖を折つれば鹿のたもやうとく成賢見

八七六 同 高砂のしめ松の嵐にはかこまたらに浪と立ける

八七七 堀百高砂の尾上の松はさしなら何をしらし鹿の鳴覧

八七八 六百今朝ぬれば雪高砂の松か枝はらにてまで降つみけけり

八七九 拾玉徒に明しくして高砂のまつ事もなき身まいかばせん

八八〇 同 高砂の尾上も恋る鹿の音は松ふく風の匂ひ成けり

八八一 同 高砂の松はえしく成ぬともまじん春の色とし思ふ

八八二 同 月も出ぬ浦風かよふ高砂の松にたへて千鳥鳴なり

八八三 詠藻たかこの尾上林見し事も思はかなし色にぬてける

俊成 八八三 詠藻たかこの尾上林見し事も思はかなし色にぬてける

未知 未知

八四三 名寺高砂の山は春やみつ塩のあはに女ゆる松の葉もなし

八五三 同 立石鳴や高砂の決り鳥跡かたなしと世を思ふかた

八六三 同 徒にいくせ過ぬぬあふ事も猫も年ふる高砂の岸

八七三 月清秋はまた鹿の音つけし高砂のふのへ程は桜むし

八八三 同 高砂の松にうら風かよ山なり尾上の花のあたり成賢

八八九 同 高砂の浦の松ももへたてきて夜こそなけれ八重の塩風

八九〇 愚乎ながさのたつと都にことつて尾上の桜今さかりなり

八九一 玉吟 船人のとろかなかめも跡やなき霞はまよ高砂の松

八九二 同 高砂の尾上の松の秋風はともよりもししする紅葉かな

八九三 一草抄高砂の松に鳴なり時鳥此みなにを船はとくめん

八九四 後撰 物思山と行てもみねはたか湯のあまのしもやも朽やしね賢見

八九五 夫木 夫木ふりのほろへのためとや羨ししも跡をたたるみのあけり玉垣

八九六 名寄 うつ波にみくる塩のたかみもたてか崎とはいふにぞ有ける

八九七 夫木 夫木ふりのほろへのためとや羨ししも跡をたたるみのあけり玉垣

八九八 夫木 夫木ふりのほろへのためとや羨ししも跡をたたるみのあけり玉垣

八九九 夫木 夫木ふりのほろへのためとや羨ししも跡をたたるみのあけり玉垣

九〇〇 夫木 夫木ふりのほろへのためとや羨ししも跡をたたるみのあけり玉垣

九〇一 夫木 夫木ふりのほろへのためとや羨ししも跡をたたるみのあけり玉垣

九〇二 夫木 夫木ふりのほろへのためとや羨ししも跡をたたるみのあけり玉垣

九〇三 夫木 夫木ふりのほろへのためとや羨ししも跡をたたるみのあけり玉垣

九〇四 夫木 夫木ふりのほろへのためとや羨ししも跡をたたるみのあけり玉垣

九〇五 夫木 夫木ふりのほろへのためとや羨ししも跡をたたるみのあけり玉垣

九〇六 夫木 夫木ふりのほろへのためとや羨ししも跡をたたるみのあけり玉垣

九〇七 夫木 夫木ふりのほろへのためとや羨ししも跡をたたるみのあけり玉垣

九〇八 夫木 夫木ふりのほろへのためとや羨ししも跡をたたるみのあけり玉垣

九〇九 夫木 夫木ふりのほろへのためとや羨ししも跡をたたるみのあけり玉垣

九一〇 夫木 夫木ふりのほろへのためとや羨ししも跡をたたるみのあけり玉垣

家隆 高倉山 同 葉塩

九〇三 詞花打むれてたぐり山にむ物ほあはたなきよと女草の花

九〇四 斬子雲の上に方代とのみ聞ゆるは高倉山の声にて有ける

九〇五 風雅君か代はしつ門田に刈稲の高倉山にのみもぬへき哉

九〇六 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九〇七 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九〇八 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九〇九 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九一〇 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九一一 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九一二 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九一三 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九一四 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九一五 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九一六 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九一七 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九一八 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九一九 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九二〇 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九二一 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九二二 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九二三 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九二四 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九二五 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九二六 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九二七 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

九二八 同 高倉院の御時大嘗会備中国歌

家隆

九一三 良玉にりなき玉の嶋江の小松塚あもはに千代の陰を見入ける
九二九 月清玉津嶋たえぬ流を汲袖に音をかけよわいのうら流

九三〇 玉吟玉津しほに千鳥の芦ふりて浪に傾く冬よの月
九三二 同 玉津嶋天つ空まで聞えぬ月影に光をさぶる玉津嶋かか

九三三 同 玉の浦はなれ小嶋の埜のまに夕あざりするたの鳴ある
九三六 同 玉の浦の輿つ白玉ひりへれと玉をふもるみろ人となみ

九三七 犬木沙風や遠よりちどり玉の浦の離小嶋に友さそふ也
九三九 同 玉の浦はなれ小嶋の埜のまに夕あざりするたの鳴ある

九四〇 玉對小夜更て月影清み玉の浦のはなれ小嶋に千鳥鳴也

玉浦

紀伊 仙寛抄

九三三 才七荒磯のまとして思ふ玉の浦の離小嶋夢にみゆる

九三四 同 九 我志る妹はあはさす玉の浦に衣かたしきひとりかもねん
九三五 同 十五 ねはたまの夜は明ぬしし玉のうしにあざりするたの鳴渡る也

九三六 同 玉の浦の輿つ白玉ひりへれと玉をふもるみろ人となみ
九三七 十五 浪のうつ玉の浦の荒磯に光をたかく夜半の月哉

九三八 同 玉の浦はなれ小嶋の埜のまに夕あざりするたの鳴ある
九三九 犬木沙風や遠よりちどり玉の浦の離小嶋に友さそふ也

相模 後集極 手綱渡 同 仙寛抄 無名

兼宋 高嶋 同 類考 高八人

兼長 玉葉我よりて後に思はん人なほくはとてかへりね鷹嶋の石

行家 高野 山橋 同 類考 西行 52+

慈鎮 九三三 山家集住こは所かそといひなほかし高野は物の哀なるへき
九四三 拾玉有難やたか野の山の岩陰に大師はいとまふはしますなる

兼昌 九四三 同 とうかなり高野の山に在明の月をもよそに何思ふらん
九四六 同 是やさは高野の奥に住心閑伽振鈴の夕暮の声

為教 九四七 同 是やさは高野の奥に住心閑伽振鈴の夕暮の声
九四八 三月 消りかきよに朝日待間の心こそ高野のおくに有明の月

為家 九四九 愚半君が代は高野の山にすむ月の待らん空に光をふもる
九五〇 犬木咲花に錦をりかく高野山柳の糸をたたくぬきにして

無名 九五三 犬木 是や此もとは高野の橋はらん聞渡りしにたかほよりけり
九五五 同 八月 朝日待こてはかたけれ高野の奥の音の洞にて

同 九五三 同 犬木 高野山こそとせとせと類しめ音にわす松はしるしに
九五五 同 君が代はたか野の山の峯の松まつも人も月やみろへき

公朝 九五六 同 契ある高野の山の嶺を松まつもほさきき月やみろへき
九五七 初葉 高野山あかき遠く松の戸に光を残す法のともしひ

公朝 九五八 藤川 降初雪より跡を絶ぬへき高野の山の冬の人へは
忠度 田中井ア 紀伊 類考 源勝

九五九 続古咲にけり苗代水にけりみえて甲の井戸の山吹の花

九六〇 続千夜寒なる甲申のるも秋風に稲ほを分て鹿も鳴なる

九六一 夫木蛙鳴甲申の井戸に日はくれておもたかびく風渡る也

九六二 新六露結玉甲申の井とひさきはに光しとふとてひ哉

九六三 題林春きてはまつせき分し苗代甲申の井戸も水る比哉

九六四 風雅忘れても汲やしとくん旅人の高野の奥の玉川の水

九六五 現六霜枯の浅野の雉子ふみ立て滝の上行狩人やたれ

九六六 名昔若くくたつひも解ぬ滝の上のあさの若令や摘まし

九六七 夫木滝のあさ野の原の浅緑うしに霞で春雨さふる

九六八 草庵落滝つ玉とみまて滝の上の浅野の露に秋風を吹く

九六九 橘の嶋にしもれば川遠みささてぬひし我した衣

九七〇 懐中嶋つたひも渡る船の槐間より落る宇やたるまのほし

九七一 夫木をかろもすたて石崎の白波はあらき塩にもかかりけむ哉

九七二 同 玉嶋 川 肥前 類々 松浦郡

九七三 同 松浦なる玉嶋川に鮎つるとさるころか家路しらすも

九七四 同 人みゆるみらん松浦の玉嶋もみすてや我は恋つともらん

九七五 同 二松浦川玉嶋の浦に若ゆつる妹とをみもむ人のともしと

九七六 名昔五月雨は玉嶋川に御船さし瀬の流はほも及はず

九七七 同 名をして誰住ならし玉嶋の此川上に衣う(つり)

九七八 同 跡もなほはれておつる白雪の玉嶋川の河上の里

九七九 玉吟玉嶋や新嶋守かとし行河瀬ほのめく春の三月

九八〇 夫木浪清き玉嶋川にうつりきて春の光も花にみえけり

九八一 類 粟玉嶋の堀江をけて霞む也風を松浦の浪の上の月

九八二 夫木わがゆつる玉嶋川の柳陰夕風たらぬしはしかへし

九八三 同 さよ中と夜は更ぬらし玉嶋の河音すみて千鳥鳴也

九八四 建保若ゆつる袖も霞にまかふまて玉嶋川に春ほまにけり

九八五 同 ましなる玉嶋川の春霞家路しらすもへてきにけり

九八六 同 いちよの光やかねてかまらん玉嶋川の春の月かけ

九八七 同 長閑なる春の光やみかくらん玉嶋河は波もこえす

九八八 同 みどりなる春の光と曇なき玉嶋川に移る月影

九八九 夫木ししせばや玉嶋川に袖ひちてなごの波に思ふ心さ

九九〇 同 玉嶋やこの河上の柳かけおつる紅葉もせかぬ日となき

九九一 同 せれゆく玉嶋河のあた波も堀江にたれば昔せのとけさ

九九二 草庵玉嶋や幾瀬のよとは霞むらん河上遠し春の曙

九九三 後撰よめなれとあなはけ立ねたはれ嶋よる白波をぬれ衣にきて

九九四 同 名にしおほはあだにぞ思ふたはれ嶋波のぬれ衣いとよきこん

九九五 夫木たはれし浪のぬれ衣ささる人の思ひをみせて飛登哉

九九六 新葉志といは化なる波のたはれ嶋たはれにくまてはけりつ

九九七 同 多波丸嶋 肥後 類々

九九八 夫木たはれし浪のぬれ衣ささる人の思ひをみせて飛登哉

九九九 新葉志といは化なる波のたはれ嶋たはれにくまてはけりつ

同

類保

雅重

定家

同

永陸

志走

家房

俊忠

衣笠

行意

走衛

内侍

行意

康光

顯仲

後九条

為相

頼阿

あつた

就人

公朝

不説

不知人

橋小ナ

日向 類字

九八三新袂拾橋の小ナの塩せにあはれて昔ふりにし神と此神
九九三神道百橋の小ナの御杖を初て今も清むる我身なりけり

高千穂獄

日向 仙寛抄巻四

〇〇四長歌スオのあまのなひらきたちはの嵩にあもりし皇の
神の御代よりはしうもたにきりもたしまか矢を

〇〇四神道百あまくたる天の村雲袖ふれて移せる水やたかほの嶺

竹敷浦

対馬 仙寛抄

〇〇三才十五たかしの紅葉もみれは吾妹が待んといひし時ぞ来にける
〇〇四竹敷の浦間のみも我行て帰くるまで散らすなゆめ

〇〇四竹敷の玉藻なみかし清くなん君が御船をいとか待ん

〇〇五同 たかしの上方山は紅やしほの色に成にけるかも

〇〇六新六たか嶋の浦間の風になみきものよりし世も思ひ知にき

玉無里

未勘

〇〇四後拾なまのくろよとまけと君もなし我住宿や玉なきの里
〇〇八名奇夏之夜は卯花月よ有ければはるも見え玉なきの里

高瀬山

同

〇〇九玉葉分行とまた鎮遠し高瀬山雲はふもとの跡に残りて
〇一〇風雅たせ山松の下道分行は夕風吹くあひ人もなし

〇一四丈夫よそにみてやすくは過し高瀬山もみちの道はなくとも

〇二四同 高瀬山あき越れば浜松の入海かけて波せいでよふ
〇一四同 吹おろすふもとの草に露落て声もたせの嶺の松かせ

津守 国量

玉出峯

同

〇〇四新拾君かたの玉ての峯にはくくる光の末は千代も曇らし

橋坂

未勘

〇一五丈夫木衣なり昔の袖もかほるやと花たら花の坂や越まし

多津細江

同

〇一四夫木興つ風多津の細江のし波にかさなる物ほうしみ也けり

〇一七同 沖風たつはせ江の浦かくれ風も吹やともしる舟人

多加登見

同

つくしへ下けるにたかみと云所にてみさこの魚
とりけるを見てよめる

副使

〇一八家集多まくれたかみたれは荒磯の波まもわかるみさこ成けり

〇一九玉葉浪の音を心にかけてあがすかなや古も月の影を友とて

〇二〇夫木たかみヤの宮人がかさすらんまつ咲梅の花を尋て

〇二六百いばつ光の女やなくさめん田中の里の多やみの空

〇三三名奇天の原霧のまきれに日ほけて申中の里に鶯鳴也

境屋川

同

〇三四名奇思山にはせれなんだけか急とも花におほめくたせかれの山

〇三三名奇天の原霧のまきれに日ほけて申中の里に鶯鳴也

誰彼山

同

〇三四名奇思山にはせれなんだけか急とも花におほめくたせかれの山

〇三四名奇思山にはせれなんだけか急とも花におほめくたせかれの山

〇三四名奇思山にはせれなんだけか急とも花におほめくたせかれの山

為兼 為守

津守 国平

木式 大津

行能 知家

俊頼 西行

兼仲 兼仲

顕昭 尤俊

俊頼 西行

兼仲 兼仲

顕昭 尤俊

寂居里

同

玉文志山

同

〇三五 夫木 都出てたひぬの里を詠は月ばかりこそはらささりけれ

詠人 不知

〇三八 夫木 玉くしの山より出る月影は光ぞへ(中)やけかららん

田中社

同

高彦崎

同

〇二六 方山 さまけの田中の社にしろはへてけし里へ(中)神まつる覽

為春 57+

〇三九 夫木 天地のひらけし代より神さびてはるかに成ね高彦崎

鎌倉 有大臣

〇二七 千首鳥 かくる田中の森の女しぬ絶えてたか秋の行立成らん

為尹

玉影沢

未勘

〇二八 夫木 さやかなる月日もせへていとしく光ぞまざる玉影の里

能宣

多買池

同

〇二九 名寄 水鳥のさほすたかか池なれば湊にのみぞ浪も立ける

思岑

多古渡

同

〇三〇 夫木 たの溪洲崎のみかた心して底の玉もは我にししせよ

人丸

谷分里

同

〇三一 名寄 川の井の谷わけ里に妹も直て恋や渡らん永き春日も

57+

多比浦

同

松葉名所和歌集第五終

名所の歌よみけるに

〇三二 夫木 嶋つたひ朝なゆふに船出して宿も定ぬたひの浦へ

肥後

〇三三 同 都出てけしやいづかたひの浦遠山松にかさる白浪

後丸茶

多毛知浦

同

〇三四 夫木 しさりし音さへこそ恋しけりけちの浦の月を詠て

寂蓮

多津那山

同

〇三五 六帖 から衣たつたの山の歌よりも妹もそ君はめつらしみせん

後丸茶

杖小野

同

〇三六 夫木 みる雨を泪と見平老らくの杖の小野に秋はきぬらん

同

多波礼野

同

〇三七 夫木 しももかなたはれの野への女郎花ねたれおきの露の気色に

詠人 不知

松葉名所和歌集第六 連曾津 祿奈

連台野 山城

○四四 出家集露と消はんたい野にをくりをけねか心を名にあしほせん 西行

○五四 粒粒朝夕にはす袖しの浦なれてともみなるめのあかればはする 知来

園韓神 同 類名

○五五 帯巻はまき木の心をししてその原の道にあやなくまよひぬる哉 重之

○四一 近きたにきかぬ御杖を何かそのから神まては遠く祈らん 同 類名

○五八 堀百その原や野風にしたくかかやかしとらにのみも乱れる哉 仲実

○四二 名貴都をは今朝ぞ立つる旅衣袖の河原の霧のまよひに 同 類名

○五九 道遠み日も暮になりぬればその原迄とよしてこそゆけ 大進

○四三 万四乙女らが袖ふる山の水垣の久しき代より思ひまき我は 同 類名

○六一 玉吟その原や行ては迷ふはまきこのよとめめ斗のしるへたになし 仲正

○四四 愚草花の色をそれかと思ふ乙女子か袖ふる山が暮の曙 同 類名

○六二 夫木夜もすから哀と思ふその原やひとり伏やう大和撫子 春隆

○四五 玉吟乙女子か紅葉の衣うちしくれ袖ふる山の秋のつゆ垣 同 類名

○六三 夫木しらさりきたのめし事も忘草身もその原に生る物とは 詠人 不知

○四六 吾妹か袖ふる山の桜花昔にかへる春風とよく 同 類名

○六四 夫木しらさりきたのめし事も忘草身もその原に生る物とは 詠人 不知

○四七 衣集風吹しつかに匂へ乙女子か袖ふる山に花のちる比 同 類名

○六五 同 山田守きその伏やに風ふけは畔つたひして鶺鴒なくなり 俊頼

○四八 同 このぬゆるあさけの風を乙女子か袖ふる山に秋やきぬらん 同 類名

○六六 新葉志すよ一夜伏屋の月の影猫その原の旅心ちして 同

○四九 同 なかめてはいかにもせん吾妹か袖ふる山の春の明ほの 同 類名

○六七 同 山田守きその伏やに風ふけは畔つたひして鶺鴒なくなり 同

○五〇 新六 秋ははや夜寒になりぬ乙女子か袖ふる山がす虫の声 同 類名

○六八 同 山田守きその伏やに風ふけは畔つたひして鶺鴒なくなり 同

○五一 夫木おどろ袖ふる山は雲消てわらひにぞく春のみつ垣 同 類名

○六九 新葉拾みちのくの袖の渡のなみた川心のうちに流てせずむ 相模

○五二 同 乙女子か袖ふる山の花薄雪うちほらふ心もこそすれ 同 類名

○七〇 同 あぶくまにきりたてといひしから衣袖も渡りに夜も明にけり 重之

○五三 同 神代も幾世かへにし乙女子か袖ふる山のみつ垣のみつ 同 類名

○七一 同 夫木しららぬや袖渡りは時雨してみちのおくまで深き思ひを 寂念

袖師浦 伊勢 出雲有同名

家隆 少侍 俊九条 衣集 家隆 伊勢 出雲有同名

寂念

〇七四 暮葉陸奥のあゆかしくもおもほゆるつほの石のみせとの浜風 西行
〇七五 夫木もちのくひせとの茨なるよふと鳥なくなる声はうとせやすがた

袖浦 出羽 類き

〇七六 早暮入はみないときたつめる袖の浦にひとりもしほもたむ蚤哉
〇七七 暮葉我身と心にしみて袖の浦のみる時もなく哀なり
〇七八 同 ながめする空にもあらしくくは袖の浦にも浪はたつこん
〇七九 同 古のなきにはかろ水くきは跡と袖の浦にゆりけり

〇八〇 出敷集忍びの涙たふる袖の浦にます宿る秋の夜のみ
〇八一 藻塩君ふる涙のかかる袖の浦は若なりとも朽たしぬへき
〇八二 愚草袖の浦にまらぬ玉のくたけつとせても遠く帰る浪かな
〇八三 同 袖の浦かりに宿りし月草のぬれての後も猶や頼まん
〇八四 玉吟しはしたにゆきてまかへん袖の浦朝みつ塩のみなき待とも

〇八五 同 しく涙ひとりやぬらん袖の浦さほく姿ほゆる舟もなし
〇八六 親聚入し袖の浦には浪かけていはての関に日数へけん
〇八七 律白袖の浦浪の花にもしらすりきいかなる秋の色に恋つ
〇八八 同 跡もなき風をたよりのしるへにてうきはかばしき袖の浦浪
〇八九 同 物思へ人の心のいともなみしはたれまざる袖の浦かな
〇九〇 同 くとほてし契のときかたしきに猶ほしわゆる袖の浦浪

〇九一 同 袖の浦に波よせかくるよみくや我かたしきの類ひなるらん
〇九二 同 波にたにぬれてはすまはありて海の釣するあまの袖の浦風
〇九三 同 よとよにも忍ぶ心のあらはれてたえすとかかる袖の浦なみ
〇九四 同 物思へいととひかたき袖の浦なみたに月せぬるおほなる
〇九五 夫木白妙の袖の浦なみまろくはもろくし舟や漕渡らん
〇九六 同 今はた恋忘れたぬ絶てひかたもしらぬ袖の浦浪

〇九七 同 旅衣立よるいその松陰に涼しくかまふ袖のつら風
〇九八 同 うたぬの寒くも有哉かし衣袖の浦にや秋の立らん
〇九九 同 袖の浦にたにわやくと塩たれて舟なかりたる蚤と社なり
一〇〇 同 袖の浦のいろの涙とはなりぬともほはなひかほらんとすらん
一〇一 同 しまりて涙かかると袖の浦に忘目をほろほろさけり
一〇二 同 きぬくは別る袖の浦千鳥猶あり明けぬせながけける

〇一〇三 名寄しらくあれとこれとや神に手向つ祈らは帝に君にぞひ山
〇一〇四 藻塩ひとりとのみきけは悲し時鳥とふの山にいやくなまかも
〇一〇五 十二真菅よきそかの川原に鳴千鳥まがし我せこわが恋しくは
〇一〇六 夫木百代といはふ御城はますけよきそかの河原の夕暮の空
〇一〇七 同 河なるいはぬの真菅ふみしたそかの河原にたよ鳴なる
〇一〇八 新葉真菅よきそかの河風ふけぬとやは鳴千鳥声よきまひしき
〇一〇九 草庵ぬれつやそかの川原の五月雨に水のみかさますけからん

〇一一〇 名寄身にあまる思ひも人に見せんとて袖の浦に飛登哉
〇一一一 千舌春きては霞の衣いくかさぬ袖の浦の浪や立らん
〇一一二 夫木沖つ風身にやしむらんかし衣袖の浦に千鳥鳴なり
〇一一三 同 塩のみつ袖の浦のかたは浪さへ鶴のねをのみせなく
〇一一四 新葉さほ姫の袖の浦の朝霞立かかてても見ゆる春哉

西行
小町
斎宮
西行
定家
同
家隆
同
女覚
順徳院
行意
走衝
俊成
内侍
志定
範茶
行家
走家
光明
兼光

出羽 類き
蚤哉
哀なり
つこん
ゆりけり
宿る秋の夜のみ
若なりとも朽たしぬへき
遠く帰る浪かな
頼まん
まらぬ玉のくたけつとせても遠く帰る浪かな
待とも
舟もなし
関に日数へけん
秋の色に恋つ
袖の浦かな
まざる袖の浦かな
類ひなるらん
浦の浦風
袖の浦なみ
おほなる
舟や漕渡らん
袖の浦浪

副山 因幡 藻塩
名寄しらくあれとこれとや神に手向つ祈らは帝に君にぞひ山
藻塩ひとりとのみきけは悲し時鳥とふの山にいやくなまかも
十二真菅よきそかの川原に鳴千鳥まがし我せこわが恋しくは
夫木百代といはふ御城はますけよきそかの河原の夕暮の空
河なるいはぬの真菅ふみしたそかの河原にたよ鳴なる
新葉真菅よきそかの河風ふけぬとやは鳴千鳥声よきまひしき
草庵ぬれつやそかの川原の五月雨に水のみかさますけからん

索我河原 出雲 類き
名寄身にあまる思ひも人に見せんとて袖の浦に飛登哉
千舌春きては霞の衣いくかさぬ袖の浦の浪や立らん
夫木沖つ風身にやしむらんかし衣袖の浦に千鳥鳴なり
同 塩のみつ袖の浦のかたは浪さへ鶴のねをのみせなく
新葉さほ姫の袖の浦の朝霞立かかてても見ゆる春哉

袖師浦 同 類き
名寄相
隆信
高逆
走範
中宮

袖嶋

紀伊 兼塩

二四 兼塩塩たるまあまのてしま潜隠し沖行舟もへめさしん

二六 夫木から衣うしわの蜚の袖嶋に春の霞ほ立せひにけり

曾許比浦

同 夫木ニ当國武未勘

二七 万五天地のせひの浦にあかごとく君に恋らん人ほざぬあらし

二八 同 女の塩のそこひの浦にくらふとも我衣手は猶やしつまん

梁河

筑前 類考

二九 家集ぞめ川の岸にせくる白浪はきくにもたかひ色にぞ有ける

三〇 城百人ころかねてしりせは中くにあひぞめ川も渡しざしまし

三一 同 うなひみかばはらのみもりあけてまき梁川も判せ替かな

三二 拾玉 隙もなく落る泪りつもりてはあひぞめ川の末にけらかな

三三 同 こまひより又沾すへき袂かほあひぞめ河の末のしし浪

三四 玉吟 山風のおろす紅葉の紅も又いくしほが梁川のなみ

三五 類聚吾妹にあひ梁川のみもあさみ心つくしにぞてやみぬや

三六 大木 どり火の浪間分るとみゆれとも梁川渡る登りけり

袖湊

同 類考

二四 純千派ぞ袖の湊をたよりにて月も浮ぬの影やとしけり

二八 新千芦間なき泪の袖の湊にもさほるは人のよるへなりけり

二九 千音うとかりし唐舟もよるはかり袖の湊をあらしら浪

三〇 同 恋ぬゆる袖の湊の浪枕幾夜うさねの數つもろらん

三一 夫木日暮れは袖の湊を行笠さく思ひの程やみゆらん

三三 同 まつら為袖の湊に清らせん唐舟のともりもとめは

三三 同 とこの海にながれて落る涙川袖の湊のさほくもつし

外面里

未勘

前内

三四 夫木神無月雪間の山に雲かゝる外面の里や時雨降らん

成重

紙喜

原宮里

山城 類考

不知

後九条

二五 万三山城のつきの原の千早振宇治の渡りの滝のやの

内大臣

二六 名寄 誰里につきの原の夕霞けふりもみえは宿はからまし

重之

二七 同 山城のつきの宮に物申我せをみれば涙くまし

俊頼

二八 玉吟 時鳥やかてつきの里はれよながなく声も絶す聞へく

慈鎮

二九 千首 風通つつきの里の梅かきも空にへたる中垣ぞつつき

元隆

三〇 後拾さきの日に柱の宿を見しゆへはけし月輪にへきなりけり

同

月輪といふ所にまかりて

家隆

三一 同 藤の花さかりとなれば庭の面に思ひもかけぬ浪を立ける

元任

二四 同 藤の花さかりとなれば庭の面に思ひもかけぬ浪を立ける

同

月輪といふ所にまかりて

同

月輪といふ所にまかりて

国時

二四 拾遺昔わがおりし桂のかみもなし月林のめしいらはは

同

海石榴市

三宮

二四 万三 はらの八十のちまたに立ならし結ひし紐をとかまくよしも

忠良

二四 同 紫はほびさす物ぞつは市の八十のちまたにあへる子やたれ

光俊

二四 同 紫はほびさす物ぞつは市の八十のちまたにあへる子やたれ

有家

二四 万三 みはかしをつるきの池の蓮葉にたまれる水の行色なみ

有家

二四 万三 みはかしをつるきの池の蓮葉にたまれる水の行色なみ

無名

二四 万三 みはかしをつるきの池の蓮葉にたまれる水の行色なみ

無名

二四 万三 みはかしをつるきの池の蓮葉にたまれる水の行色なみ

頭付

無名

無名

兼塩

津守浦

撰津 類考

一四四 丁二天船のつりの浦につけんとはまきしに知てわが二人ぬし

一四七 阿十一住江の津守綱引うけのものをうかひぬかん恋こあしすは

一四八 拾玉忍びつ二年も津守の浜ささきかゝる浦にあはれはせせん

一四九 同 思ふ事つりの浦のもしほ草りくしけりぬ住吉の神

一五〇 同 住吉はよはひつりの浦なれば神は年をやおほしまであらん

一五一 名寄住吉の松の絶間の紅葉に津守の螢は秋を知らん

一五二 同 冬もいまだ数つりの浦寒て雪にもなりぬ霰松原

一五三 新六我袖の海もなるも津国のなかつ涙のつもりなりけり

一五四 夫木秋の夜のみむこの高根に雪降て津守の浦によす白玉

一五五 同 けし海にいく年なみも過ぬらん津守の浦の浜松のみし

一五六 御集思ひぬ津守の海士もうけのものをたえぬはともよる方もなし

一五七 同 行末は猫も津守の浦風に雲らぬ月の影の長閑き

一五八 題林浪かぐる松のしづえも朽ぬへし日数もりの浦の五月雨

一五九 新葉年来きためしは誰もはらしん松りもりの浦の白雪

角松原

撰津

仙覚抄三首四
藤壺二武庫御

一六〇 万三吾妹には野は見せつらき山角の松原いつかしめさむ

一六一 同 あまこせしとりのた火のおほしくの松原おもほゆらかも

閨鷄野

同 菜塩

一六二 としてややみの堀江に舟とめてつけの鹿の声を聞らん

一六三 堀百つけの野に大山もりか納めたる水窟せ今も絶せりけり

一六四 夫木古のけのふみかりそれより水窟のおもひたて初けん

一六五 同 月影も遺霜ともや思ふらんつけの鹿の声の懐る

大津

人丸

懸鎮

同

同

行進

門院福

俊成

羽院鳥

同

重賢

上院打

高市

不審

一六四 同 湊川うさぬ床によよこ秋をつけの鹿も鳴也

津國羅江

同 名寄歌枕吉圓

一六七 名寄雪ふればあしらのうら葉も浪越てなまきさも分ぬははらふらえ

一六八 夫木あし行たつの羽風に打たひき螢なみよるはつふしえ

一六九 同 つらんの瀬の霞も春消て霽に七渡り秋の夕暮

撰津海 同

一七〇 百廿津の國の海の汀に舟よそひ出しても時にあもかあも

一七一 名寄かきりなく思ふ心をつけの山やまくちもそ頼むへらなれ

月詠宮 神社 伊勢 類考

一七二 西行記こす念みは秋にかきらぬ若なりけり春おもしろき月詠のもり

一七三 名寄やみ深き浴世を照すちかひには我まとはすな月詠の神

一七四 夫木神代より光やかけて卯花の花もあまてら月詠のかみ

一七五 百道三の御名とがへますにも光猫天にみちた月詠の神

伊勢 名寄三有

一七六 名寄はほし崎まはてはいかと越々へきつみの嵩を打詠めつ

都追美井 同

一七四 百廿すかのはゆま馬やのつみめの水をたま分妹かたこても

津嶋渡 尾張 藤壺

一七八 名寄伊勢へはひかとしけり津嶋よりかひ川行は泉野の原

長明

無名

長明

長明

一七四 夫木 今日の日ははかりとへすと母人のつしまの波風もこそたて

鶴郡

甲斐 類考

一八〇 六帖君が為命かひと我はゆくつるの郡のまはひなれとも

一八四 後探君が代は鶴の郡にあへてきね定むき代りうたかにもなく

一八二 名青甲斐の国つるの郡の板野なる日玉すけ並にぬひけん

一八三 夫木雲の上に菊ほりうへてかいの国鶴の郡をうしてて見る

一八四 同 才代も君にゆつらん為にともつるの郡さなへ取らぬ

鶴岡

相模 類考

一八四 柳探鶴が岡木高き松を吹風の雲ぬびなく才代の声

一八四 名青年へたる鶴が岡への松の葉のあをみにけりな春の駿に

一八七 夫木山ちり出てやまつる里ちかまつるが岡への鳴郭公

一八八 同 つるが岡あふくつはさのたすけにたかきに移れ宿の鶯

都筑原 郡岡

武蔵 和名都筑郡

一八四 十五百武蔵の草のゆかりもとひかぬつさきの原の雪の夕春

一九〇 夫木いかせんつさきの岡のくすのはの恨て後は又も帰らず

一九一 同 むさし野のつさきの郡つさつものしちよも思ひらんなり

筑麻河 入江

常陸 類考 近江有同名

一九三 拾遺鹿嶋なるつまの神つつくくと我身ひとつに恋を積つる

一九三 千五百あも事はつまの神にけりきてなへの敷にいれしとれきは

一九四 夫木つくま川入江にをのさきはねはあしゆら葉に水しぬらし

一九四 同 遙なる人し心をつくま川ふかきに跡は見ゆるものかは

中番

筑波 根山

同 類考

一九四 万三つはぬをよとにみながらありかぬて鷹けの道なつみくかも

一九四 同 八つはぬに我ゆけりせは時鳥山考よあなまましやせれ

一九四 九けしの日にいかをよほんつはねに昔の今さけんその日も

一九四 同 筑波根にひくはまゆの衣はあれと君かみけしし鱧にまほしも

一九四 同 筑波根に雪がもたらぬが岡も悲しき比かにぬほさるかも

一九四 同 つはぬのぬ方に霞をすさかてにいさく君をいぬてやとせぬ

一九四 同 妹が門や遠ときぬ筑波山隠れぬ程に袖はふりてな

一九四 同 筑波根にひくはぬのぬをか鳴渡りな人あふもほほしに

一九四 同 つはぬのをてもかにもにりすも母もれも玉そあひにける

一九四 同 甘あかもての志もしたはつはぬをふりさけみつ妹はしぬはぬ

一九四 同 つはぬのさゆるの花のこもくにも志しけ妹せひるも悲しけ

一九四 同 赤集つは山咲る梅の匂ををけりておらぬと外ながらみつ

一九四 同 堀百つはぬや白雲かふる松山の千年の影のさもしるまかな

一九四 同 東路やしぬほさかひに宿りして雲おにみゆるつは山かな

一九四 同 六百番君にわれおかく心をつは山しけき敷きにりはてぬ哉

一九四 同 へしれす君に心をつは山隙なき物ほほけきなりけり

一九四 同 拾玉春をへて心を花につは山梅がらてほしけしざりけり

一九四 同 つはぬしも残れる夏の色を秋のうづ比引かへてさほ

一九四 同 筑波山しけき梢をこしなへてさなから花と思ほましかほ

一九四 同 名奇桜花開やしぬらんつはぬのこのまかのもにあまる白雲

一九四 同 建保百筑波山しけきまさき教よりもしとぬは人の心なりけり

一九四 同 つは山はやまをわけしけけきよりしけりせまざる涙思ほ

一九四 同 つは山しけきけきの下露にをのか心しほりせとふ

一九四 同 なにとなくもへらつは山かけよりしけき思ひ有身に

丹比

大伴

出磨

無名

同

同

同

同

同

小蔵

太倉入

源順

源順

巨房

頭仲

権大夫

経家

慈鏡

同

同

順徳院

俊成女

内侍

忠走

三〇同 つれなき人にも心をつはしたえぬけきのしけき比哉

三〇同 嵐波山しけきなけきをわけ侘でものれと迷ふ恋の道哉

三二同 月清誰にと春の心をつは山あらかもに風渡るなり

三三同 愚年今ほみ思ひつくは山あらししけ敷と吹まつたへよ

三三同 玉吟 筑波山しつてにたえぬ谷水のいかなる隙にもしとせめまし

三三同 つはねの新葉まきゆのきぬまりも霞の衣春いせくらし

三六同 御集つはねの夏の木陰にやすらへは匂ひし花の名残ともなし

託馬野 江沼山 近江 仙覺抄三当坂田郡

三三同 万三つま野に生る紫さぬにせめいたまきすして色に出にけり

三三同 六帖三哀の心もつらくま江のさみ渡るはししすや有らん

三九同 堀百雲間なくしりもすさまぬ五月雨にづくま沼のみ草浪よる

三三〇同 家集年もへて君に心をつくま山みねは雲のに思ひやらかか

三三〇同 家集折にあひて人我身やひかれましつてま沼のあやめなりは

三三〇同 夫木つくま江の沼の水や深かりしへくるしめのあやめ引なり

三三〇同 つくま江の芦のよけたきかりのみかきにしたかれにけり

三三〇同 つくま江の眞菅ましろのわかみ草かかりほん夏の日にけり

三三五同 名舟つくま江に生るみくりの水深きまたねもぬにへ恋しき

津野岡 同

大倉念徳紀方御屏風津野岡

三三六同 夫木つゝ岡みみぬにほる梅花若かみかといかまじなりけり

三三六同 月出崎 同 類ま

三三七同 新拾は多くと曇りなきまよたふなり月出崎の邊の釣舟

艷赤 月吉里 美濃 薬塩

行春 三二八 薬塩やみなしはねぬへき物もたためぬもよまきたる月吉の里

徒紫極 三三九 夫木くもりなきまよのあかりに空晴て尤もよる月吉の里

走表 筑摩湯 信濃 類字

三三〇 後拾出るゆのわくに懸れる白糸はくろく人絶ぬ物にそ有ける

三三〇 夫木わきかへりもえても思ふうき入はつくまのみゆかしの烟か

三三〇 右つくまの湯を見侍りて

三三〇 壺碑 陸奥 門殿橋

三三〇 右番思ひごとく千嶋のおくを隔ぬとえそ通はきぬつほう石ふみ

三三〇 家集陸奥のゆくゆかしくそおもほゆる壺のいしふみせとの深風

三三〇 拾玉陸奥のつほのいしふみ行て見人それにもかかしたまきとは

三三〇 同 思ふ事いふぬちのくろくえといはぬほろいしふみかつくさねは

三三〇 夫木いしふみやつかつのをらにありとまきとえそ世中を思ひはなれぬ

三三〇 同 陸奥のつほのいしふみありとまきとえそ世中を思ひはなれぬ

三三〇 同 良玉日教へてかくふりつもる雪なればつほのいしふみ跡やたえなん

三三〇 同 山榴岡 同

三三〇 六帖三陸奥のつほの岡のくまつらつしと若をけしとせりぬる

三三〇 堀後東路やつしの岡をまきてみれば亦もつとせと色とせかよへる

三三〇 鷓鴣 出羽 薬塩 常陸

三三〇 名舟あしめ鶴しまいもほらなれぬは雲のたへそ恋しかりけれ

三三〇 月之山 同 式出雲 薬塩

三三〇 津野岡 同

三三〇 同

三三〇 同

三三〇 同

三三〇 同

三三〇 同

二五二四 夫木月の山くらしぬけはいつなく麓の里に住人せしる
二五三四 又壁の月の山へは家おしていら時どなき影を見ん哉
加賀 大進

露嶋

二五四 夫木 白玉をけけるかほきうつるとも見えもわかれば光つゆ嶋
二五五 同 朝ことばきやますしん曇なき玉をけけるともゆつゆ嶋
陸奥 同

津軽嶋

二五六 六帖わがれと別々と思はず出羽なるつからの嶋絶しと魚へは
二五七 夫木 だよりあはつかるるおくにもめられてえと帰らぬと妹に告は
二五八 同 えとがすむつからの野への萩さかりやにしきこのひて成らん
二五九 同 いしのみやつからのまらにありとまくとせ中を思ひはれぬ清輔
詠人 不知
大進 師
魏隆

敦賀 山

越前 類考

二六〇 僕探 我をのみ思ひ敦賀の越前は帰るの山はまとはこまし
二六一 名寄 引別れる空をなき梓つるかの山の若のかけみち
二六二 夫木 梓乃つるかの山を春越てかへれる雁は今せなくなる
二六三 同 わかぬ錦とや見ながら人の敦賀の山の嶺の紅葉
二六四 同 白真つるかの舟路さるも猫をしてひきこす浪のかけかは
二六五 同 帰ら山思ひつるかののし海に架やふがき春のかりかぬ
後鳥羽
二六六 万三 越の海のつがの波に大船に真穂ぬきおろしさいなとり
同 仙寛抄
二六七 角嶋 能登 藻塩
金村
無名 14+

二六八 万六 かもたのつる島の嶋の小蝶をい拾ひ持て石持て
同 藻塩
無名

鞍山

丹波 類考

二六九 金葉音高きつみの山の打はへてたのしき御代とるを嬉しき
行盛

角乃浦 里

石見 八雲御抄

二七〇 石見の海つ浦わを浦なみとへそ見ゆめ為なみと
二七一 同 夏草の思ひなへて歎しんつる里見んはひけこ山
同
二七二 万六 かり火の所定す見えつるはなかりつみのたけは成けり
つみのたけを
類考
隠岐

津田 細江

播磨 仙寛抄

二七三 万六 風ふけは浪かたんとまづ程につたの細江に浦隠れぬ
二七四 類聚 五月雨の日をふるまにかはり行つた入江のみをつくしかな
二七五 五葉 興つ波つたの細江の浦かくれ風も吹やと泊る舟人
二七六 夫木 寒くくつたの細江の塩風に鳴小夜千鳥うしかれにけり
二七七 同 夜もすからつたの細江にもとす火はゆる螢の光なりけり
二七八 同 はに出来るうさぬの芦のしけはつたの細江の草かくれつ
二七九 同 我心つたの細江をく舟の君にせよせしうら隠れても
二八〇 草庵 思ひ出よつたの細江を漕舟の行あふ中は遠ぶかるとも
二八一 名寄 思ひ出よつたの細江のしき波にがさるる物は恨なりけり
同 頼阿
為家 15+

弦打山

讃岐 藻塩

二八二 名寄 つらうちの上より出る月影はゆみほりとそよひふかりけれ

二九四 表集我恋はつゝぬみ決と降りなん心をくみて人ほしらへく

兼盛

津尾崎

伊予 仙覚抄野間郡

都筑山

同

後鳥羽

二八三 万三茅人ほは田鶴がね鳴てみほも風寒く吹らんつをの崎ほも

庄主

二九五 夫木春雨も花のとたえと袖にもる梅つきみの山の下道

後鳥羽

筑紫小嶋

筑前 八雲御抄

妻木山

同

衣笠

二八四 初探大和路のさこの小嶋を過てゆかほつしつゝ嶋おもほえむかも

大納言人

二九七 名寄ゆつとも暮行きになきまざる秋のをしかの妻恋の山

衣笠

鞆滝

肥後 類考

鶴里

同

俊頼

二八四 表集山川にぶかるこ笛のあれほこそつゝみか滝にあほもまくらめ

重之

二九八 夫木世ともに住はつまさの山はけはながや鹿の秋を過さん

俊頼

二八六 千首こは比は浪うつ岩に苔ふかしつゝみの滝の音や聞えぬ

奈良

二九四 夫木君が代はつるの里なる松原の波の真砂も数ならぬかな

祐季

二八七 柗純吉音にさくつゝみの滝も打みればたゞ山川のなかにぞ有ける

不詳人

対馬渡

対馬 八雲御抄

寝山

尾張 藻塩

二八八 万一ありねよししまのわたり渡中にぬみ取りむけてはや帰りぬ

春日殿

三〇四 良玉ぬ山ごころしつのおみにあらねともあらぬ歌をもつぞ苦しき

孝吉

二八九 名寄舟へのつしまの渡浪高みすまわつしよや此世成らん

中務

三〇一 散木子規をのぬ山のしわしはにかりぬはや昔信もせぬ

俊頼

二九〇 夫木こそこのつしまの渡り浪あらしいかは梶とり心ゆるすな

行家

三〇二 新六そよやきけあくるぬ山の時鳥名乗しつゝと忍ほざりける

知家

二九一 同 漕出る対馬のわたり程遠み跡とくかすあゆきの嶋松

基綱

三〇三 夫木さく袖の露のふかさもある物をぬ山の裾のうほ鹿の声

慈鎮

対馬根

同

秋野をぬ山

同

二九二 万四千しほねほほはたくもあらはふかんの根に棚引雲を見つ忍ほん

無名

三〇四 夫木さく袖の露のふかさもある物をぬ山の裾のうほ鹿の声

長

都武賀野

未勅

嶺の雲

同

二九三 万四千つむが野に鈴が音聞ゆかんしたのふからし鳥狩すししも

無名

三〇五 夫木つれて行ぬ山もしらぬ日鳥のさきの世も浮身の契かな

行家

津井井次

同

祢寛里

美濃 一説尾張云々

躬恒

三〇六 六帖東路の祢寛の里は初秋のなかせ夜独あかず我なぞ

三〇九 方 風の音におとろかいてや 吾妹が 栲寛の里に衣うつらん

三〇四 同 ひとりのみ思ふは山 栲寛里ぬめてて人を恋あかしつる

三〇一 十首あられすよ 栲寛の里の梅が香に鶯来る月の明ほの

根尋浦 丹後 藻塩

三二二 名奇くく人もなきぬねはは 浦なれば心とけすけ見ゆるなるへし

子日詩 同 藻塩

三三四 名奇はるめなるぬの日の崎にすむ 海士はみ松をみ引やますらん

眠森 未勘

三二四 新説古生茂々ぬぶりの杜の下にこそ 目覚し草はけり火かりけれ

雙岡 山城 葛野郡

三二六 六帖秋風は思ひみだれてあやしきは 君となしひの岡のからがや

三二四 堀百思ふとちならひの岡の坪 董うらやましくも匂ふ春かな

三二七 夫木つし味ならひの岡の松陰に 同し多日の色せうつらん

三二八 同 啼つくく蟬の諸声 隙もななくならひの岡の夏日くらし

三二九 同 いれも秋ほそむしん 多時雨ならひの岡の松下草

三三〇 夫木千年ともかさらし物も 君が代にならひの岡の松の行末

三三一 同 幾千年契りかきまし 君が代にならひの岡の松の村立

三三二 同 一法の花たえずならひの岡の松とも 千年のかけはがはらし

三三三 同 暮のころならひの岡をきて みれば露のみしけき小篠原哉

三三四 草庵かすくはに松もならひの岡へ より木の本見えす出る月影

伊勢

為尹

長岡 里 山城 八雲御抄

三三四 十五首なが岡や田(しん)庵のあはれまくに 栲寛いかなむ鳴の羽かき

三三六 夫木花輝あはれにし物も 長岡の里をほめれすなにもなくく覽

三三七 五社百長岡や落穂拾ひし 山里に昔も懸て田つらもど行

橘小河 同 類考

三二八 初秋風ぞくはしめし 小川の夕暮は御祓そ夏あしけなりけり

三二九 説古年へおるなら小川に 御祓して祈しせをも猶過せとや

三三〇 新古御祓するなら小川の 川風に祈を渡ら下に絶しと

三三二 六帖打はへて落々 泪にかな滝のたさけてもみぬが倦し

三三四 山歌集しほしき入あつこみ せかれければけけ泪や鳴滝の川

三三四 夫木 鳴滝の落くる声の音なきはこほりのくさひさしてけら哉

三三四 同 なる滝の岩間水 解ぬらし春の初風夜半に吹なり

三三五 名奇明方に寝はなり けり鳴滝や西の川瀬に落る月影

為相 同 類考

三三六 堀後夜とくもに思ふ事なきを 鳥やけけを井の池に住らん

三三四 同 奇世中にしてむとなら 照月の影をならひの池にすまはや

三三九 夫木八ほい我ほ音の忘られぬ心ならひの池にすまはとふ

三三九 十首これマ堤のうへさし 柳ならひの池に春風ぞ吹

三四〇 同 いがきくならひの池のをし声わが たらけて明方の空

為相 同

三三九 夫木八ほい我ほ音の忘られぬ心ならひの池にすまはとふ

三三九 十首これマ堤のうへさし 柳ならひの池に春風ぞ吹

三四〇 同 いがきくならひの池のをし声わが たらけて明方の空

公經

為家

俊成

家隆

兼明

兼子

兼代

貴之

西行

高遠

好忠

為尹

大進

俊頼

能宣

為尹

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

三四一 六百番聞わたる契りも深きえにしあらは末もたもし中川の水

三四二 名舟中川にすく田井のぬなき事あしはれて社あるへかりけれ

三四三 夫木中川の渡りの桜むかしより先咲花と見しもかはす

三四四 同 中河の渡りにさける卯花は垣つぎに浪も越ける

三四四 同 七ツのくもてはしらす中河とはや打渡れかささきの橋

三四六 同 また更にすまはやすまん浮草のささはれ出る中川の水

三四七 題林さくのえはもく白露の潤なれや浮中河のつもる恨は

三四八 草庵かすかなる音と聞ゆる冬寒みむすふ水の中川の水

三四九 同 うたかたの消にし跡も今更にむせむやまさる中川の水

三四四 同 うたかたのうかひやすると中河の水の心に任せて見る

三五一 藤川影やとす月をそれともわかぬ深き霞の中川の水

三五二 千首いとけなきとみかたらしみになくさみぬつらき行急の中川の宿

名木河

同 八雲御抄

三五四 万九夜手のなきの河へも春雨に我立ぬる家おもふらんか

長坂 水室

同 藻塩

三五四 六帖たらねのいさめしつみにたつさぬ長坂ほる駿あらせよ

三五五 堀巨君かへん御代長坂の水室には結ぶ氷もけぬけなりけり

長谷河 山

同 藻塩

三五六 六帖三なが谷けしりかほせよ山彦も昔の声はきこしれらん

三五七 斬六見わたしの岡久しほは散過て長谷山に風ふくなり

三五八 名舟若嵐や八塩をめたら紅葉も長谷河にをしめたたら

三五九 大木への命長谷山にならうといはしぬる所はあらしと思ふ

名葉池

同 春雨抄二当国

三四〇 夫木時鳥今と五月と音をたてながらの池はあやめ引也

奈良 山柳里

大和

三四一 一青によしならぬ家には万代に我もかよはん心づくと思ふ

三四二 同 三青によしならぬ都は咲花の匂ふかこく今さかりなり

三四三 同 藤浪の花はさかりに成にけりならぬ都もおもはずや君

三四四 同 五菟の馬も今もえてしが青によしならぬ都に行てこん為

三四四 同 六紅に深くも見にし心かもならぬ都にとしのへぬへき

三四四 同 石綱の又若婦り青によしならぬ都を又も見んかも

三四四 同 名付にしならぬみやこめれ行け出立毎に歎しますも

三四八 同 秋されは春日山か紅葉みながらぬ都あいらくおしも

三四九 同 あは雪のほとろくに降しけはなれぬ都におもほゆるかも

三四〇 同 梅花のわはらさし青によしならぬ人かきつ見るかも

三七一 同 我宿の秋咲にけりちすまにはやさて見しならぬ里人

三七四 同 青によしならぬおほらけ行よけと此山道はゆきあしかりけり

三七四 同 青によしならぬ都けりぬれと本時馬がぬあはなくに

三七五 同 拾玉九重に匂ふみけし桜こそならぬ都に猫まさりけれ

三七六 名舟重咲ならぬ都は跡絶て石すへみそかたみなりける

三七七 同 禮祿百音によしならぬ都の玉柳色にもしく春けきにけり

夏実河

大和 仙覚抄

三七八 三吉野のなつみの河か川流に鴨せなくなる山陰にして

三七九 同 丸山高み白木綿花に落滝一夏実入川とみれとあかぬかも

三八〇 同 大滝を過てなつみにとてみて清き河せもみるかさやけき

具氏

不詳

小朝良

大伴

大伴

大伴

不知

不知

大伴

三八一 愚草影清き夏み川と秋かけて白ゆふ花を照す夜のみ月

三八二 玉吟風寒みむをたふまし山陰や夏みの川も氷しにけり

三八三 夫木陳もなくする日浪とみゆる哉夏みの河の岸ハ卯花

三八四 同 あすよりはつみみの川の川風にしらな山陰にして

三八五 同 住むる時夏みの河波に山陰涼しみよしの里

三八六 柳某山陰や夏みの川にのる鴨の上毛ハ霜はきゆる夜もなし

三八七 新葉百つみ川山陰にのみぬる鴨のなかれて絶ぬ浮名ともかな

三八八 草庵寒る夜のみ宿かな夏み川こほりもほけてす山陰にして

那良志岡

三九四 万八古郷のならし岡の時鳥言告やりしにかにけり

三九〇 拾玉時鳥いかにまやまし及び音をならしし岡に尋まりせけ

三九一 同 郭公へよりとまに我きかん声をならしし岡はいつくそ

三九二 名舟音にのみならしし岡のさわかづら入しれすことくしまほしけれ

三九三 十五猫またんけりてまやまし時鳥こそまならしし岡ハ声

三九四 夫木秋風は思ひみだれて悲しきは君をならしし岡のからかや

三九五 同 しき鳴やぶらるる都は埋れてならしし岡に雪もりつゝ

三九六 同 立よらん事やはかたき春霞ならしし岡の花はなすすとも

三九七 同 かりにても契あればはからん太きつゝならしし岡の草ふし

三九八 同 さわくくる君よひかへせ古郷のならしし岡の鳥の音ならし

七瀬淀

三九四 六帖飛鳥川なごせの淀に住鳥も心あければこと泊たましめ

四〇〇 統古飛鳥河ほと利とも成ぬ覧七瀬入淀の五月雨のころ

四〇一 統後飛鳥川七瀬入淀に吹風ハ徒にのみゆく月日かな

大和 類考

定家 四〇二 玉吟春の日も今いく日かけ飛鳥河七瀬入徒にのみみかな

家隆 夏実上 同 名舟二当国

中院 四〇三 万十我宿の浅草色付ふなほり夏みの上に時雨降らし

撰政 四〇四 名舟ふなほりの夏みの上ハ山を出て西をさしたる月ハ影みゆ

西園寺 同 橘山 勅撰名所集き園茶上御

後鳥羽 四〇五 万四君に恋いとすへなみならし山小松か下に立歎くかも

氏定 四〇六 同ハなら山の嶺の紅葉とつけちる時雨ハ雨しまげく降らし

傾河 四〇七 同 なら山をにほす紅葉も手折きて今夜かさしつらしほらるとも

同 四〇八 同十三大君さみことかしのみ見れとあがぬなら山越てまきつめる

同 四〇九 玉吟なら山みことかしはもめくむら古郷ハ桜おろころ

田村 同 中山 同 薬塩

慈鎮 四一〇 家集はるかにぞ思ひやららうとからぬ我中山の松の梢に

同 四一一 夫木君もす我もゆかすの中山はなけきのみことしけるへらなれ

前計 同 奈志原 同 薬塩

有家 越前 四一二 夫木君はかりあほゆる物けなし原のむまや出んたひなき哉

長方 四一三 同 時鳥さきゆる事むなし原のむまやくとまら明しつる

奥方 四一四 同 しがたはぞむる時雨もなし原のむまや有て山山の紅葉

行家 浪柴野 大和 薬塩

尤使 四一五 万十我門の浅草色付ふなほりの浪しはの野も紅葉散らし

四一六 名舟あせましや浪柴の野に立鹿のつめのわれのみぬる袖哉

四一七 夫木秋風になみ柴の野のまろくは思ひをふとや鹿の鳴覧

四一八 同 ふなほりのなみ柴の野の秋風ははやくよ渡る月のさやけ

公雄 無名 俊頼 衣笠 定嗣

順徳 虎徳

23*

波激 官岡社 河内

四二九 家集うちつけになきさの岡の松風を空にも浪のたつがとく聞
 四三〇 堀自ぬ事ほなきさの岡に宿りしうし悲かる恋もするかな
 四三一 名舟夜もすから奥の鈴鴨羽羽りしりなきさの宮にきね靴うつ
 四三二 夫木片野なるなきさの梅いく春かたえてといひし宿に咲しん
 四三三 田鶴のなる波激の岡の松かぬに夕浪かくと見ゆる卯花
 四三四 同 卯花咲る比もや白浪のよするなきさの岡にしうらん
 四三五 同 風吹はなきさの岡の花薄なびくや波のよする成らん
 四三六 同 行人もなきさの岡のしの薄ほに出で誰をまねく成らん
 四三七 同 千首海士のすむなきさの森の梅花とすか塩木に残置けり

難波 若江浦迎 摂津

四二八 二難波為塩ひなありそぬ沈みにし妹が姿をみまぐるしも
 四二九 同 難波為塩ひの名残あくまでに人のみる子を我しどもしも
 四三〇 同 万回我もぬをくにななきせと綱引する難波男の手にはふるとも
 四三一 同 難波津にみよぬけてぬと聞えこは紐とまきけて立ほしりけん
 四三二 同 難波為塩ひの名残まくはしみ家なる妹か待とはんだめ
 四三三 同 たゞえんの比道にして押原や難波の海と名付けししも
 四三四 同 難波為塩ひにならて見渡せば淡路の嶋にたつ鳴波を
 四三五 同 難波に人のゆけはくくぬて若なつむ子をみるか悲しさ
 四三六 同 丸難波為塩ひに出で玉藻かる蕃の乙せら汝かつけさぬ
 四三七 同 難波人若火なくやのすたれともか毒こそ常めつらしき
 四三八 同 おしするや難波菅笠もまきふし後誰さん笠ならなくに
 四三九 同 難波為塩ひ出する舟のほろくし別てくれと忘れかぬつも
 四四〇 同 難波津にもそびくしてけの目やいなくまかしんみる母もがし

四二九	同	よそにのみ見てや波らん難波為塩ひにみゆる嶋ならなくに	山代御
四三〇	同	梅花今さらなり難波の海押照宮にきこしめすなへ	家持
四三一	同	海原のゆたけきみつし井かちる難波に年ほぬへく思ほゆ	同
四三二	同	難波津に御舟おらすえやそかぬき今ほ漕ぬと妹に告こそ	広足
四三三	同	おして島難波の津より舟もよびあはれは漕ぬと妹に告こそ	道足
四三四	同	難波とを漕出でみれば神さぶる伊駒高根に雲そ棚引	三成
四三五	同	六帖津国の難波の浦の橋君を思はあからめもせず	中業
四三六	同	難波為深へあしをふみしたき鳴さんたつ我為にかも	小町
四三七	同	難波為塩みらくれば山み端に出月さみちに行けるかも	伊勢
四三八	同	人しれす物思ひ時は難波為あしのかしらぬもせしれやはする	貴之
四三九	同	芦の屋のこやともいは津国の難波の事かいはす有へき	兼盛
四四〇	同	難波津につくみ波る芦のぬねほひ尋て世を頼む哉	重之
四四一	同	家集秋風に塩みちくれは難波江の芦のほりも舟も行ける	重之
四四二	同	我恋は難波の芦の浦なれば浪りよらうこそと聞つ	信明
四四三	同	難波為塩ひと小舟はあし若のえさる程こそえしかりけれ	元真
四四四	同	難波江の草葉はすたく聲をば芦間の舟のかりとや見ん	公実
四四五	同	難波女のあしかり丸やもいつてとたぬほかりに降る白雪	同
四四六	同	夜もすからあなし吹なり難波為塩ひに浪り花や咲らん	河内
四四七	同	難波為塩ひをばみ降雪をももけにははむ芦の下折	同
四四八	同	六首番これこころあふ人の詠へき難波わたりの春の明ほ	兼宗
四四九	同	いかたも見ても思はん難波女うさわの跡に消る白雪	寂蓮
四五〇	同	住侘て世にふる道はしらうとも難波若かりにたに見ん	同
四五一	同	家集いしかと春きにけりと津国の難波の浦を霞へあたり	西行

四六四 同 水分る難波堀江のなかりせはらかに空まし五月雨の比

四六四 同 霧のほろろの若葉に月寒て秋をあらし難波江の浦

四六四 同 難波過月の光にうら寒て浪のおもてに氷をそしく

四六四 同 霜にあひて色あらたむる月のほろろしくゆゆる難波江うら

四七〇 同 難波過塩ひはむれて出だん白洲の崎のこ貝拾ひに

四七〇 拾 玉津国の芳のしやにとまるとは難波の事も命なる哉

四七二 同 あしかりし身こそかはらぬ皆へは難波の事も昔ならぬに

四七三 同 心あてに詠行かな難波過雪の花咲あしの枯葉を

四七四 同 色染ていく塩ふかし難波津やけし神垣に匂ふ此はな

四七五 同 詠藻身のうきに折らしぬははしほれ芝の世を難波の何か恨みん

四七六 同 難波江の芝の古根は我なれや恋路にひちて年のへぬらん

四七七 同 難波過芝へは冬のけしきにくかはらぬ物は鶴の毛木

四七八 同 名寄芝の葉も霜かれにけり難波過玉もかり舟行通ふみ佈

長居浦 湯浜池 根津 類考

四七九 同 現六住吉の岸もせしとや小夜十鳥ながめの為へうらつたふらん

四八〇 同 堀百嵐しく伊駒の山の雲晴て長居の浦にすめる月影

四八一 同 君が代のながみ浦にむれみつとも十年を契た哉

四八二 同 秋の夜は長居の浦による浪のかへろと枕寛られる

四八三 同 拾 玉君が代に千年くらへとせせばや長居の浦の松と鶴とに

四八四 同 十五君が世も長居の浦にぬたつても代までと声聞ゆなり

四八五 同 夫木ともつとをとかいていくか成ねらん長居の浦の五月雨のころ

四八六 同 君が代は長居の浦の波千鳥音の跡にけしや逢はん

四八七 同 皇の長居の池の水澄て長閑に千代の影を見えける

四八八 同 住吉の長居の浦もたふられて都へとのみいとかるかな

同 吹よする浦風涼し夏の日の長居の浦の松は下かけ

同 君が代は長居の茨にぬたつあまたの千代もあかすと有ける

同 春くれはみどりの空に鳴たらの長居の浦に友とそふ也

同 思はずよ長居の浦の芳わけの都にばなともはるへしとは

同 慈鎮

同 長柄 橋浜沼浦 同

同 四九三 同 我集とほれてもあはれたとてなくさめし長柄の橋も今は閑えず

同 四九四 同 我恋はひからの橋の下よりもつくる世はくも成にける哉

同 四九五 同 千代をなからん波の細石のこよひよりこそ昔はむすしめ

同 四九六 同 心たに長柄の橋はなからへん我身にへはらへさるへく

同 四九七 同 入しすめたしめけん橋なれや思ひひかりに絶にける哉

同 四九八 同 家集年ふれば朽とまされ橋柱昔がかりの名たにけはらて

同 四九九 同 堀百朽にけり是や長柄の橋柱哀むがしの跡はかりして

同 五〇〇 同 吾番かくこそは長柄の橋も絶しかとほし斗の名残やはけき

同 五〇一 同 今も猶長柄の橋はつくりて人つれなき恋は跡たにもなし

同 五〇二 同 我が身や長柄の橋のほし柱にひに朽なん名をば残とて

同 五〇三 同 拾 玉我身をほなにか今はたもふき長柄の橋も事ふりにけり

同 五〇四 同 き渡る長柄の橋の古をほの見ま江と思はましかは

同 五〇五 同 朽にける長柄の橋の跡にきて見ぬ昔まで行心かな

同 五〇六 同 君が為跡なき身には成ねとも長柄の橋の名もたにぬかな

同 五〇七 同 またふりぬうき身をもつて思ふかな長柄の橋の古跡

同 五〇八 同 詠藻いひかよふ道たにたえぬあふ事の長柄の橋はまこと朽なめ

同 五〇九 同 玉吟むがしたに昔朽けも津国の長柄の橋の跡をこそ思ふ

同 五一〇 同 君が代に今もつくら津国のなからん橋や千度わたらん

同 五一一 同 夫木ひくぬまへはうなるかな君が世のなからん沼に生るあやめは

同 公彦

為家

不知

羽衣

実家

興風

兼盛

元輔

信明

忠見

忠見

仲実

有象

信走

兼宗

慈鎮

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

五二四 草庵古の跡も長柄のはし柱たてるは春の霞なりけり

頓阿

五三三 夫木屋合のかけもちせはなこの海も天川せの心ちこそすれ

経信

名次山

撰津 八雲抄

五三四 万三吾妹にいな野はみつたつき山角の松原いつかしめさん

高野入

五三三 立かへり猫過かてにみつるかなな江の浜にまする白なみ

為条

鳴尾 浦里泊

同 類考

高野入

五三四 霞ふらなる浜への真砂ちにいれをもとのたまも拾はん

具氏

五二四 山家集常よりも秋になるおの松風は分て身にしむ心ち杜すれ

西行

五三四 御集なる海の入をあらふ浪の上に春の別の色をそへつ

磯馬

五二四 拾玉我身も鳴尾にたてるひとつ松よもあしきも又類ひなし

意鎮

五三三 長洲 茨池

同 類考

五二四 世中はしかになるおの松がらんたつらならぬ春にあはせや

同

五三四 秋集さまのなすのすはま頭れて塩ひ入江江水せすくひき

兼輔

五二四 名奇塩風はなるおの松に音信てわたる江に残る月かけ

同

五三四 新六我袖の海となるおは津国のなかつ淡のつもりなりけり

為条

五二四 新六わが袖の海となるおは津国のがす泪のつもりなりけり

中務

五三四 夫木を我にゆするや声絶す長洲の浜に鳴渡らん

相模

五二四 建音風うけはなるおの松ののれのみこととひかはす鹿のゆふ声

西園寺

五三四 君が代はなすの境に年をもへて十年かさぬる鶴の毛衣

師光

五二四 月清友とみまかなふにたてる松よなく我もさて過る身ぞ

後紫極

五三四 浦に塩焼けふりたされは行過かてて山に柵引

加量

五二四 夫木浦さひし哀なるおのともりかな松風寒て千鳥なく也

法師

五三四 浦もそかひに見ゆる與嶋漕たむ舟は釣もすも

赤人

五二四 なるふなる友なき松のつれごとととりもくれにたりける哉

俊頼

五三四 夫木なげ海雲にたして見渡せけみたる御回は遠からぬかな

永隆

五二四 やさむくなるおの里の秋風になみかけ衣うたぬ旨はなし

為条

五三四 紅葉こそぞむきにみゆればはの浦の時雨や與の鳴めくらん

琳賢

五二四 藤川良興の風雪ふきかけて白妙になるおの松は葉あしてけり

四条

五三四 紅葉する高つのみやに風吹は鈴もあらふはの浦なみ

実家

五二四 那古海 浜

撰津

五三四 紅葉こそぞむきにみゆればはの浦の時雨や與の鳴めくらん

秋九

五二四 住江のなみ浜へに馬たて玉拾ひしく常忘られす

無名

五三四 名奇住吉のなごしの岡の玉つくり数ならぬ身は秋そかなしき

好忠

五二四 雨はふりかりほほ作らいつの間になごの塩ひに玉はひろはん

同

五三四 夫木白露のなごしの岡のうす紅葉かづ秋の色やせらん

為条

五二四 なるこの海を朝ささくれは海中にこそ鳴ゆる哀そのか

同

五三四 六月のなごしののりの時鳥声のかまりけこれにや有らん

貴隆

五二四 名奇がつきの峯の霞をいろむ日にたごの浜江の水とくらん

嵯峨

五三四 名越岡

同

五二四 名越岡

名越岡

五三四 名越岡

名越岡

五五三 同 六月がなごしの杜り多すみ御取もまたぬ秋の下風

灘田 浦 同

五五四 六帖春風のいたく吹しなだ海士の釣する小舟さし帰るみゆ

五五五 統古あしひのわたの塩くむ海士くもしほるか袖のともなき迄

五五六 月道芦のせのわたの塩やさいとまあれ磯山桜かさす海士く

五五七 夫木芦のやのわたの塩風心あらは磯山桜浪にちらすな

五五八 同 春は徳ながき日暮し引網の心ゆるえぬわたの浦人

五五九 夫木あしひのやに浪のよるさへうつ衣なだの塩やき晦ぬのよ

五六〇 同 なだの浦の塩になつそふうみ松を河の浪を年は越くる

五六一 同 つなで引なだの小舟や入ぬらん難波のたつの浦渡りする

並茨 横津 藻塩

五六二 名舟ふしゆるや難波の崎の并茨なへんと社そのこはありけり

名立浦 同 藻塩

五六三 名舟がつかするなだの浦の蜚人は浪のぬれ衣いよぬらん

長茨 伊勢 遠江越中三河同名

五六四 家集ながたにわた塩た々郭公五月はけりはあまじりける

五六五 拾玉芦田鶴住長茨をきてみれば幾世になりぬ雪の毛衣

五六六 名舟君が代りためしとみゆる長茨に十種貝の数も知りす

五六七 夫木皇の御世長茨に舟出してたのしき声にうたふ海士人

五六八 藤川百おなし世になやありやも白浪のよる絶にしかたの長茨

波河 同 類考

五六九 纏扇巻なみた川りかのみなほも消ぬへ流て後せをも待すて

香能 五七〇 同 あふ瀬なき泪の河に沈しや流るゝみかの初めなりけん

五七一 家集なみた川にける水が流るしんぢと我志をけつ人のなき

五七二 同 うき事のかくむ時は泪川目のまににそ落さまりけれ

五七三 同 波河浜へにまぬ舟舟はこもて風や吹とそまで

五七四 同 なみた河落る水上はやければせきせかぬつる袖のしかしみ

五七五 同 せとやみ袖よりもみる波川物思ひもぢき人も沾けり

五七六 同 とし深き人の別なみた河袖のしかしみ思ひこせやれ

五七七 堀百泪川ももうき舟の活には思ひ絶せぬつなで引なり

五七八 同 後なみた河みはなほうかふうき草のつきまねとめんかたのなき哉

五七九 六首 波河深くながるゝみおがしは浅き人ぬにまさし

五八〇 山家集 波河深くながるゝみおがしは浅き人ぬにまさし

五八一 同 物思へは袖にけるゝ波川にけるみおにまふ有らん

五八二 拾玉 波河人目つみもきとぬぬれは袖のしかしみかみせぢき

五八三 詠藻 泪川袖のぬわたにわさかへりやるかたもなき物こそおもへ

五八四 玉吟 波川身さへながるゝ浮まくらなまなますはあはと消はん

五八五 夫木 恋めふる泪の川のうき草はへにねも見ぬ我身なりけり

五八六 同 せ絶してみはなながるゝ泪河せこもあらはに水とちつゝ

五八七 同 波川あふ瀬ほまもいな舟の下にこかれぬ浪の間もなし

五八八 同 なみた川まろねの中のまろき橋こぬうきせと夢も通はず

五八九 同 波川舟出やせまし伊勢の海のみかは渡る湊だつぬて

五九〇 同 人ものみうみに出たる泪川さてもまなくみるめやけある

顯照

流江

伊勢 類考

五九一 六帖 伊勢の海の小野の湊の流江の流ても見ん人の心を

五九二 新十流江のいせの汝我打とまき涼しき風にもふ燈かな

躬恒

伊勢

同

貫之

同

元輔

同

巨房

顯仲

信定

西行

同

慈鎮

俊成

衣隆

清純

走衣

俊九条

同

輔規

衣隆

貫之

圓冬

五九四 同 伊勢の海の小野湊の入塩に流江遠く鳴千鳥か
五九四 名寄 塩むか小野湊の流江に猶漕ねく河らひ舟
五九四 夫木 藤浪はさきこほれたる流江にまらぬ春の日教もせし

并宮

同 夫木三箇同

五九四 夫木 木たきの原ならひの宮の神たから猶まつらさ沖つ白浪

成海 鴻浦里海浜 尾張 類考

五九四 六帖いかにてわれ心をたにもやてしは遠くなるみりもみかして
五九四 堀百なるみ鴻沖にむれぬてあちむしのすたく羽根さほくなる哉
五九四 同 なるみ鴻朝みつ塩やたがらんめさりとせよたつ鳴渡る

六〇〇 拾玉 後世事もしと思ふ教ならすなるみの浦の浪の立居に
六〇一 名寄よと入なるみの海へ重霞忘すともへたて果なき

六〇二 同 一行駒のかけも夕日になるみ鴻いせけや塩のまたみちぬまに
六〇三 同 なるみかた塩に浦や成ぬらん上野道を行人もなし

六〇四 同 音にもあらずなるみの里にさて柳志しき旅ねをそする
六〇五 同 海士の住里のしるへなるみ鴻我身つれなき恨せまじや

六〇六 月清なるみ鴻あらし磯浪の音はして沖の若くす月の影かな
六〇七 愚草 都思も淡くもなるみ鴻月に我とふ秋のしほ風

六〇八 玉吟 心あはくみるめの夜の月けになるみくうら見てかぬる
六〇九 建保 塩風や秋は夜寒になるみ鴻螢のときやも衣つななり

六一〇 同 一物思へば音にだてしなるみ鴻聞人浪に浦風せしゆく
六一一 同 たよりたに行あしとすや成海鴻浦こく船を梶をたなは

六一二 同 ものから風としらへたらみかた跡なき浪に道まよふとも
六一三 同 いたらに幾年波をたつらんよそなるみくうらみせしまに
六一四 同 あかつきはをのかさぬくなるみ鴻うらみて帰さ沖つ白浪

為重 六二四 同 袖のいろの深くなるみくうらみもそ今は形見と思ひせ入つる

光俊 六二四 同 教ならして哀なるみくうら見哉世のこほりも人とかは

信実 六二四 夫木 聞からに哀なるみ小夜千鳥霧立浪の末の松やま

六二四 同 なるみ鴻塩瀬はるかにひにけらし昨日沖を通ひかち入

六二四 同 なるみ鴻をかめくりて行人は都つに何をかたらん

六二四 夫木 なるみ鴻若の浦風たてすは同じ心に神もりくらん

六二四 同 みつ塩のさしてそきつるなつみ鴻神や哀と見ぬめ尋て

六二四 同 なるみ鴻うきぬの床は風寒て更行まに千鳥鳴也

六二四 同 御集恋せよとなかみの浦の塩の鴻かと思ひにせしはれ他ぬる

六二四 同 よる浪も哀なるみ恨さへ重ねて袖にさゆるこころ哉

六二四 夫木 今朝みけはなるみの上のうすみとりせれかともゆる若草

六二四 同 打わたす今か塩になるみ鴻ともよる舟の声も通はず

長明

景綱

静賢

行意

俊繁極

定家

家隆

隆信

走衛

俊成せ

内侍

忠定

知家

名高浦

遠江 類考

長教

同

朝忠

人丸

伊予

長浜

同 類考

大原 桜井 遠江 任に侍りける時その初雁の

たよりにもと奏し侍ける御返事

六三三 新拾あふの浦のその長浜による浪のゆたにそ君を思ふ此比

六三三 十五あふの浦のその長浜による浪のゆたにそ君か千代の末哉

聖武

皇武

公朝

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

鳴沢

駿河

六三四 百十四さぬらくは玉のを斗ふらしくは富士の高根鳴沢のこと
 六三四 新拾飛登思ひは富士となる沢に移ら影こどもえはゆらゆらめ
 六三四 御集けふりち思ひのしやばはららん富士のなる次音むせゆ也
 六三四 千首ふしのの雲おに消ぬ雪の色を今夜や月になる沢の水
 六三八 散木雲のゆるゆるなる沢風にして清見が関に錦をりかく
 六三四 夫木五月雨は高根も雲のうちにして鳴沢ふしの駿なりけり
 六四〇 同 五月雨に富士の鳴沢水こえてしるや烟にたちまきらん

奈留加海

上総 木本二当國

六四四 夫木ろはりの月の宿れる底も見てはるか海に暮の入しん
 六四二 同 都出てまてにならかみ渡舟いつれの亦まきて行らん

奈佐可海 浦

常陸 仙覺抄

六四四 百十四たむらひさかの海の玉藻こそひけは絶すれ跡も絶せん
 六四四 堀百東なるなさかの浦に塩みちて有明の空に千鳥はほなく

榛子山

同 類聚三國或衆邦

六四四 類聚つねに我林ぬせしか置露の名をむつかしむ榛子の山

七社

近江 類考

六四六 堀後いりる事な御社としくとあはせよく口ほしる也
 六四七 拾玉我頼むむの社のゆふたすさかけても六の道にかへすな
 六四八 同 三世まてに結ひもさける契かな哀と思へばこの御社
 六四九 新六八乙女のふらてふ鈴のこころに七の社は宮のせりこぞ

無名 六五〇 愚草やはらくる光さやかに照し見も頼む日吉のなま御社
 六五四 公雄 六五一 玉吟早振七の社の七十に千代をそへてや猫守らし
 六五四 宗良 六五二 夫木万代の春にもあかし八重枝なまます神の玉のみつかけき
 六五四 俊頼 六五三 夫木君が世を万代とこそかぞふしめなこの社のみつのみしりは
 六五四 同 二なきやとせの法を奪るとてなまます神は跡もたれける

同 長村山 近江 類考
 六五四 兼盛 六五四 統後君が御代むかむら山の榊葉を十代人がかさしいはせん
 六五四 兼盛 六五四 夫木万代は長村山のながらへてつきすはこはん御調物哉
 六五四 兼盛 六五四 夫木万代は長村山のながらへてつきすはこはん御調物哉

同 長等 同 類考
 六五四 兼盛 六五四 夫木万代は長村山のながらへてつきすはこはん御調物哉
 六五四 兼盛 六五四 夫木万代は長村山のながらへてつきすはこはん御調物哉

同 鹿の音ををくるながら山風も稲葉に聞やしかり人
 六五四 兼盛 六五四 夫木万代は長村山のながらへてつきすはこはん御調物哉
 六五四 兼盛 六五四 夫木万代は長村山のながらへてつきすはこはん御調物哉

同 色はけちながら山風も稲葉に聞やしかり人
 六五四 兼盛 六五四 夫木万代は長村山のながらへてつきすはこはん御調物哉
 六五四 兼盛 六五四 夫木万代は長村山のながらへてつきすはこはん御調物哉

同 秋の日はながら山の紅葉は天津の里のかさなりけり
 六五四 兼盛 六五四 夫木万代は長村山のながらへてつきすはこはん御調物哉
 六五四 兼盛 六五四 夫木万代は長村山のながらへてつきすはこはん御調物哉

同 衣笠 名取河 同 類考 犬上郡
 六五四 兼盛 六五四 夫木万代は長村山のながらへてつきすはこはん御調物哉
 六五四 兼盛 六五四 夫木万代は長村山のながらへてつきすはこはん御調物哉

六七〇 表葉はとり川渡りてつくる小山田をもちにけつよかれのみする
六七四 古今犬上との山なる名取川いとたへて我名もしすな
重之

長沢池

近江 類考

六七二 詠藻長沢にけのあやめを尋ても千代のためし引へりける
六七三 類聚としめに絶す引なりあやめ草ぬも長沢の池を尋て
俊成

六七四 夫木長沢の底なる葉なるもかよほひも若にもや思ふ
能宣

六七五 同 君か代のかかきためしに長沢の池のあやめはけふとひかる
俊光

長峯山

六七六 詠藻万代を折せかくる長みねの山の樹をさねにいにして
俊成

六七七 夫木菅のぬの長みねの梅花かされる雲の末せはるけき
俊光

六七八 同 榊葉のほけしぬ色を頼むか君せよほひのなつか嶺の山
巨房

六七九 同 君かせば長峯山に葉なる小松の千度生かはる迄
頭輔

連庫山

同 仙覺抄

六八〇 万七さ波やなみくらし山に雲みくは雨を降てふ帰れわかせと
無名

六八一 玉吟思ふ入まつ里あしは五月雨のなみくらし山も夜半に越なん
家隆

中麻奈

信濃 万葉三巻 回歌中

六八二 万十四ながまになりきまなる船のこきてはあふ事かたしけふにあらすは
無名

六八三 類聚しなかなかなすの御湯をもあむさはや人をほくむ病やむへく
法師名

六八四 拾遺 塩かまの浦さひしけになぞもかくせをしもふもひなす
能宣

那須御湯

同 類聚三巻 回歌下野

六八五 塩百いぢればはなぐりのゆのわくかといつる泉の涼しがるらん
基俊

七久里湯

同 類考 或紀伊

六八六 同 後世の人の恋の病のくすりとやなぐりのゆのわかへるらん
常陸

六八七 夫木いちしなる岩ねにいづらなぐりのけふはかなきゆにも有る
俊綱

六八八 同 いらしなるなぐりの湯も君か為こひやますと聞は物うし
任信

六八九 徳拾遺 つきもせず恋に涙をわすかなきやなぐりの出湯なるらん
相模

六九〇 名号下野のなすのゆりかねはかりな夜はかりてあはぬ君哉
三宮

那須野

下野 藻塩

六九一 夫木かり人なすのな野は心せよかく隠れおれきふすなり
為春

六九二 同 かり人のゆすふりたてらかへともかせばたみえぬすたかや
權僧正

六九三 同 みちおほきなすの御符のせきけひにのれぬ鹿の声を聞ゆる
信史

名取

里川 那御湯 陸奥

六九四 山葉集はとり川岸の紅葉の移る影は同じ錦を底にさへしく
西行

六九五 名号しつてとふ人はありとも恋すてふ名取の里をそこと知すな
陸奥

六九六 同 大空の雲の道路見てもかなとりのみゆけは跡はかまなし
陸奥

六九七 月清歎すよ今はたおなじなとり川せこの埋木朽はてぬとも
俊家

六九八 愚草名取川いかにせんともまたしらす思へば人を恨けるかな
定家

六九九 同 なとり河心にくたす埋木のことほりしらぬ袖のしからみ
定家

七〇〇 同 なとり川心とはん言の葉もしらぬあせは渡りかね
同

七〇一 玉吟名取川心とは埋木のした行浪のいかたへん
家隆

七〇二 夫木散花のものをれあたる名取河風さうらみし春の若浪
雅証

七〇三 同 時鳥をの五月のなとり川は埋木の頭てなけ
少将

七〇四 建保をろかなる波をあたに名取川せきあへぬ袖はあらはれぬとも
順徳院

七〇五 同 埋木の浪に朽ぬる名取河うさなはかりやうさて流れん
定衡

七〇六 夫木名取川せこの埋木あはるな紅葉は上の色にいつとも
範宗

七〇七 同 埋木もしはし紅葉の名取川頭て行冬のあらしに
俊家

七〇八 春雨塩がまの浦にはあまや絶にけんとすなとりのみゆる時なき

名無沼

陸奥 大木三吉園

七〇九 大木陸奥の名なしの沼の水絶ていはいはれとも人たりのめなる

不説人

奈古曾閑

同 類名

七二〇 水集陸奥の名なしの関にけりれとさくく猫もいえぬへき哉

中務

同

同

七二一 同 待入のとをたうみそ佐しければなごの関に今はさほらし

同

七二二 堀百東路の名ごの関の呼び馬なにつくへき我身成らん

俊頼

七二三 同 是るくも尋きにけり東路に是やなごの関とさ遊

同

七二四 同 逢坂は越にし物を今はたごの関の名ごおしけれ

永縁

七二五 同 恋侘て昨日もけしも越へきにほごの関を誰かすへけん

河内

七二六 同 立別はつかあまりに成にけりけりやなごの関を越らん

師頼

七二七 同 後名にしよはなごといふと吾妹に我けりさほはゆきせ関守

基俊

七二八 同 都人恋しきまでに昔せおほなごの関にさほらにやあらん

兼昌

七二九 拾玉みちのや春まつ嶋のうは霞しほしなごの関路にも見る

慈鎮

七三〇 名貴おしめともときりもあへず行者もなごの山の関もとめなん

貫之

七三一 同 かくはかりなごの関と思ひける人にも心に留めん

顯昭

七三二 同 夫木東路はなごの関に聞かにいひとくしと登る声

小侍従

七三三 同 ゆきやせんゆかすやあらまじ東路の名ごの関呼び馬哉

家長

七三四 同 なげや今遠方過る郭公名にはなごの関といふ矣

安芸

七三五 同 東路の名ごの関におひながら猫なまねく花薄かな

為教

七三六 同 折葉ごと更になごの関を相坂の山のあなだに誰かすへけん

不知

七三七 同

不知

奈曾白橋

出羽

七二八 名貴いけはなるなごの白橋なれてしも人をあやなく恋渡り哉

長浜浦

能登 兼盛 和名能登郡

七二九 百七十七の海に朝ひらきして漕けいほなかの浦に日照にけり

大持

七三〇 新六朝はつながてふあまみらめたに猫ほし絶ぬ長浜の浦

行家

奈良

浦入江海

越中 仙覚抄三吉園

七三一 万七舟はてしかし振たてゝ庵りするが江浜場かてぬかも

藤原卿

七三二 同七なごの菰の釣する舟は今こそはらななうらてあて漕てぬ

大目

七三三 同 なご海沖つ白浪ししくにおもほえんかも立別はほ

赤持

七三四 同 あゆの風いたく吹しなごの海士も釣する小舟漕かぐる見ゆ

同

七三五 同 漆風吹く吹らしなごの江に妻よひかはし由鶴沢になく

同

七三六 同十八の海に舟しましけ沖に出て波立くやと見て帰らん

福丸

七三七 同 浪たてはなごの浦間にもる貝もまじき恋心と年けはなご

同

七三八 同 なごの海に塩はやひはあざりに出んとなごは今も鳴なる

同

七三九 同十九あゆをいたみごの浦わにまする浪いやらへしきに恋渡りかも

丹比

七四〇 六百番なごあまやく塩畑空にみ我名をたてやまんとやする

顯昭

七四一 名貴なごの海あれたるあさの嶋隠れ風にかたよりすか村鳥

經正

七四二 同 夕されは妻よひかはし鳴たの声吹送るなごの浦風

隆朝

七四三 同 夫木浦風やふけ行まに來かしなごの江に十鳥妻とふ

仲史

七四四 同 なごの海の塩ひらか秋霧に猫あらほね磯の浦松

実清

七四五 同 なごの海の塩ひらか秋霧に猫あらほね磯の浦松

為家

七四六 同 夫木多されは盛風吹くかみ浦の來ますききたつそ鳴なる

公朝

七四七 同 春のながく江にまよふはつ草のけつかにみてしくそ恋しき

鷹司

七四八 同

家隆

七四九 同 徒にくちや果なんたつなぐなへん小菅結ほれつ、
衣笠

越中

七五〇 万七まつたえの長波邊てうらび河清き瀬ともうかはたも

赤古 継橋

越後 八雲御抄

七五一 名舟東路のなご継橋渡らねと世にふる道もあやうかりけり

七五二 同 かきつはた咲てや花のへたつ覽とたえかくるなご継橋

七五三 夫木いさしも越路かなご継橋もあやなく我や歎渡らん

七五四 同 いとしく恋路に迷ひ我身かなご継橋たぐみし

長良村

丹波 藻塩

七五五 藻塩秋の夜ふながしの村の里今やけき月に衣うつらん

七五六 夫木はるくと年も遙に見ゆかななご村なかごいね

長嶺山

同 名舟

七五七 名舟楫の葉も若ふまてに成にけり幾世かぬなが峯山

長尾山

同 藻塩

七五八 夫木 諸人のぞかゆく道は長尾山また行末ぞはけかりけら

七五九 同 手向して春や行しし早振長尾の宮の花のゆふして

長田村 里社

同 類名

七六〇 新古神代よけしの為ちややつかほに長田の稻かほひ初けり

七六一 夫木かほひは数もしられず吾か代は長田にくろなかなのいね

七六二 同 若か代はかくへつさんかたぞなきかたにちくちもこのいね 中務

七六三 同 長田なるちもこのいねを敷にてよむともさし若か代は 親経

七六四 同 命たに長田の杜なかりせばはよりに吾か宿をみましや
為頼

七六五 同 雨露もめぐりあまぬき時にあひて長田の里に早苗もる也
兼仲

七六六 同 つかげらる長田の村に住へかりつむ稻のけかりなきかた
實忠

泪浦 磯

丹後 木三吉園

七六七 夫木ひとりぬるぬやの隙より八月や流り浦に影うかりん

七六八 同 あはせらば塩ひり玉藻いかせんがみたり浦にぬる衣を

七六九 象果 袖の上は泪か磯の蛇貝いてやよしなき片おもひかな

長考山

播磨 木三吉園

七七〇 夫木はりまひるがひの山の霧晴て千年の春を見らる嬉しき

七七一 長歌なますみの舟瀬にぬゆる淡路嶋松ほけ浦に朝けき

七七二 同 一行かへり見るともあかめやなきすみの舟瀬み攻にしろき白浪

七七三 夫木はさすみの舟瀬を過て今みればとむきに霞む粟の嶋山

鳴嶋

同

七七四 万二室の浦せもの崎かななき嶋の磯す浪にぬれにけるかも

七七五 夫木まの浦せとの鳴しまなきもれとぬれにぞぬる問人はなし

長田山

備中

後系院御時長和五年大會会主基方御屏風

に備中回長田山の麓に琴ひき遊ひしたる所も読る

七七六 千代とのみおなほしこととそくらむなる長田の山が峯松風

長井

備中 藻塩

七七七 夫木十年ふるさぬきとけしふる我君の長の水の年へたる哉

長尾村

同 類名

七七八 夫木はるくと年も遙に見ゆかななご村なかごいね
正宗

七七九 夫木はるくと年も遙に見ゆかななご村なかごいね
正宗

七八〇 夫木はるくと年も遙に見ゆかななご村なかごいね
正宗

俊三院御時大嘗会備中国歌

七七八 新拾遺にも今行末も思ふ山長尾村がなきためにし

長等河

同 類考

経衡

七九四 十五思ふ事しほはくさう深千鳥跡とがまへ若く浦わに

七九四 夫木しら雲のちへの交手立別けや若草の山路越らん

七九四 同

七九六 同 里がよふ葦のゆきも跡たえぬたれとなくさう涙の白雪

七九四 風雅汲人のよはひもさそな長月のなから河の草の下水

七八〇 夫木ほこ屋のちきりの末のなから川あふせはいつの秋も絶せし

隆輔

七九七 同 紀の國のななくさう涙に貝ひろふ葦のめさしう音なかりせは

鳴門

周防 藻塩 阿波有同名

七八一 子五これや此名におなじもら打塩に玉藻刈とよび乙女とも

七八二 名奇大嶋のなにかち塩みちてけしはなるるとに泊ぬを哉

七八三 家集大嶋のなるとよ浦もこまかたさうへとの涙もかや有覽

元真

七八四 万十一一が嶋のなつみ浦にまら浪のあひたも置て我思はくはに

七八四 名奇夜半の月名高の浦の浪の上に秋はなかはとりに往らん

八〇〇 夫木さの國の名高の浦に行舟のまほにも人を相見てし哉

夏実浦

同 八雲御抄

長門浦

長門 勅撰名所集三書

七八四 万十三乙女らが桶にたれたる鏡なすなかと浦に朝なまに

無名

八〇三 万二なきさけの杜にみゆすへ祈れとも我大君はたか知れぬ

長門嶋

同 勅撰名所集并 八雲御抄三書

七八五 万五我命をなかと嶋の小松原幾世をへてかかむさひ渡る

七八六 同 恐しけみなくさみがぬて日くらしのなく嶋影に庵するんかも

七八七 十五豆君が代は長門の嶋の小松原神さきて又若葉さす迄

香能

八〇四 山家集雲消るはちの高根に月闌て光をぬける滝のしら糸

七八八 万七なくさ山とにしありけり我恋の千重に重もななくとめなくに

七八九 家集声もたにさけはなくさの茨御古果忘す常に魁こよ

七九〇 同 はかなくやけふの子の日を過ぎまし名草の茨に松なかりせは

七九一 同 とよとになくさう涙のなくさまは浪のよるまもあらしと思ふ

七九二 詠藻あまの刈みらぬを浪にまかへはなくさう涙を尋ひぬぬら

七九三 愚草友千鳥若草の涙の涙風に空へまざる有明の月

兼輔

八〇四 夫木石はしら滝にまかひてなちの山高根をみれば花の白雲

七八四 同 雲かゝるなちの高根に風吹は花おきくたす滝の白糸

八二四 同 又たくひなちのを山にすむ月の清き光に松風をふく

俊成

八二四 同 思ひ出る袖へもかほかぬはなちのを山の奥の滝つ瀬

定家

那智 山滝決 高根 同

八〇五 拾玉がさねても流もたえぬみくまの涙ゆる春のなちの滝つせ

八〇六 名奇なち山の雲ゆに見ゆる若ねよりちいろにかゝる滝の白糸

八〇七 愚草雲かゝるなちの山陰いかならんみせればけしななかまのやみ

八〇八 玉吟雲かゝるなちの滝つせ風吹は古き軒端に玉をちりける

八〇九 夫木石はしら滝にまかひてなちの山高根をみれば花の白雲

八二四 同 雲かゝるなちの高根に風吹は花おきくたす滝の白糸

八二四 同 又たくひなちのを山にすむ月の清き光に松風をふく

八二四 同 思ひ出る袖へもかほかぬはなちのを山の奥の滝つ瀬

西行

慈鎮

光寺

人丸

俊頼

櫛隈

女

櫛隈

女

櫛隈

女

櫛隈

女

櫛隈

女

櫛隈

女

有象

雅經

不純如

八二四 同 遙はるちの浜も遠て浦と海との果は見えけれ

八二四 同 三熊野ちちのを山に引しめりちちへのみ落る滝かな

八二五 同 滝の首に松の嵐も埋れぬちちのを山の秋の多くれ

八二六 千首おち滝つ若うつ滝のちちこもりさても心は猶や染しん

七越嶺

熊野へ参りけるにさししの嶺の月を見てよめる

八二七 山峯集立のほる月のあたりに雲消て光がさぬるなこしの峯

鳴滝

八二八 新古思ふ事身にあまる迄はる滝のしほしまとむを何恨らん

比歌身のしつめる事を歎て東の方へまからんと
と思ひけり人熊野のおまへに通夜して侍ける
夢に見えけるとぞ

鳴耶茨

八九 懐中なぐさますなをたつ人は夜とよに宿をせなくかの浜のまに

鳴門 浦

八二〇 六帖がるとより出てやきつるみつ塩のひるまきをみねは恋もよ

八二一 歌集海士小舟鳴門にはく漕出るかの浦さ君もいかによ

八二二 同 音にさく鳴門のもとにかきさする蜚も化しきめをみする哉

八二三 堀百見るまに人心のありしもあらず鳴門のうらめしき哉

八二四 同 風はく鳴門の浦の舟よりもとまり走ぬ我身成けり

八二五 拾玉数ならす鳴門の浦うら人は浪のよるなる物をこそ思へ

俊成 八二六 同 寒さるる冬塩風北よきてあはの鳴門の音ぞはけしき

鎌倉 八二七 名舟とさう海めけの鳴門をさしかなら田いくる遊君ほましませ

公朝 八二八 同 里の蜚はなるとの浪もみえなれてたしく水鶏はならぬ哉

為尹 八二九 同 天の原浪のなるると漕舟の都恋しき物をも思へ

八三〇 同 誰ぞの鳴門の浦に音するは泊りもとむる蜚の釣舟

八三一 同 日暮れは思ひもあぬ我恋や鳴門の浦に音する塩の音

八三二 千首音にさくなるとの浦の塩風にはかに通ひ友千鳥哉

西行 八三三 夫木住吉の松の嵐にがよふなりあはの鳴門の浪の音まで

八三四 同 塩風なるると斗にあはち鳴うかれに見えて渡る舟人

八三五 同 思ふ事なるとの浦にひろひつかひよりけりと知てしかな

八三六 同 吾代代はけるかなるとの浜ひさしえさかけは神のまに

八三七 同 いせかてやかちひきおりに舟人もあすになるとの塩や待らん

中水門

八三八 歌 天地の日月とよにみちゆかん神の御面とつきさくる

ながのみなとに舟うけてわか漕くればとよつかせ

雲をふくに奥みればあと浪たちへをみれば

白浪とよみいでなとり海をかしこみ行舟の

名越山

八三九 万十我せも名越の山の呼子鳥君よひかせ夜の更ぬまに

八四〇 六帖六月のなこしの山の呼子鳥おほぬさのみ声のさこゆる

八四一 名寄六月の御祓川原の帰るまになこしの山の雲を明行

八四二 同 吹風をなこしの山の桜花いとけそみちららしと思へ

名尾山

八四三 同 吹風をなこしの山の桜花いとけそみちららしと思へ

同

無名

仲正

重之

俊頼

俊鳥羽

慈鎮

為家

相模

家長

俊九季

賀大臣

同 仙雲抄当国

人丸

同 藻塩

同 藻塩

土佐

無名

不詳

不詳

頼氏

同

同

同

八四四 万六名にのみをなご山とおひて我恋の千重の(重もなごさまなくに

坂上 即女

八五九 六首番絶はてぬなごの山に雲消してはる心やほし合の空

顕昭

浪懸岸 浦

同 藻塩

長居岡 同

鷹司虎 477

八四四 懷中我神のぬるをなごにたごへましなみかけの岸世になかりせは

高遠 467

八六〇 夫木暮かゝるなごの岡をきてみれば霧のみしけき小篠原哉

寛寛 477

八四四 夫木なみかけの浦のぬ覚にいとしく物思ひごふる雁金の声

祐拳 八六二

八六一 同 なみすていとまごな過せ時鳥長めの里の松も頼ん

光俊

八四四 同 松のぬに頼れにけり年をくいでてくつれぬ波懸のさし

長沼野 同

八六二 同 なみ沼の野を朝ゆけは山とえにかひの白根はついにぬゆ

光俊

奈毛木森

大隅 類考

棟丈

八六三 夫木はくくともなご沼のあやめ草千年のけふはひかんとぞ思ふ

仲実

八四四 夫木時鳥なごの杜にありすして若か待よは過にける哉

慈鎮

八六四 同 君か世は猫長沼のあやめ草行末遠く尋てそ行

家俊

八五〇 同 神さしるなごの杜の時鳥引しめ縄もなくくそこし

俊頼

八六四 同 莫入洲 同

為尹

八五二 同 古のなごき森の名もつらし我なごことみ神の水垣

信実

八六四 同 波屋浦 同

為尹

八五三 同 まとはるなごの杜のさねがつら絶ぬやへくつら成らん

信行 470

八六六 懷中なごのやの浦に住てふ曇なご塩にさぬれて衣くちけり

為尹

八五四 題林ぬきことぞのなごけん杜とそはてはなごの杜となるらめ

親玉 475

八六六 同 淡安 磯 同

為尹

八五五 名寄よのつねの秋の物がは佐人のなごの色の深さは

信行 470

八六六 同 淡安 磯 同

為尹

八五四 万九あすよりは我は恋んは名ほり山若山みならし君か越いなほ

信行 470

八六六 同 淡安 磯 同

為尹

八五七 同 命をしまえしけれはほり山石のみならし又またもこん

信行 470

八六六 同 淡安 磯 同

為尹

名欲山

対馬 仙寛抄ニ島國或播磨

信行 470

八六六 同 淡安 磯 同

為尹

八五七 同 命をしまえしけれはほり山石のみならし又またもこん

信行 470

八六六 同 淡安 磯 同

為尹

八五七 同 命をしまえしけれはほり山石のみならし又またもこん

信行 470

八六六 同 淡安 磯 同

為尹

七瀬

未勘

信行 470

八六六 同 淡安 磯 同

為尹

八五八 金葉しらせはなごの江に神ひちてせの波に思ふ心を

信行 470

八六六 同 淡安 磯 同

為尹

八五八 金葉しらせはなごの江に神ひちてせの波に思ふ心を

信行 470

八六六 同 淡安 磯 同

為尹

情山

同 藻塩

松葉名所和歌集卷六終